

「ゴブリン？ 恐いから会いたくないけど会つたら処理するよ」

ブランク蟻

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

こいつらの存在を知ったときは恐怖した。実物を見たときは心から嫌悪した。こいつらとは一生関わりたくないと思った。しかし、そうはいかないらしい。だから決めた。こいつらと遭遇したら全力で殲滅すると。

「だからと言つて遭遇し過ぎだろう!!!!」

イヤーワン

目

次

第18話 第17話 第16話 第15話 閑話 第14話 第13話 第12話 第11話 第10話 第9話 第8話 第7話 第6話 第5話 第4話 第3話 第2話 第1話

120 105 96 88 81 73 64 58 48 42 36 31 22 16 10 6 4 1

# イヤーワン

## 第1話

「どうしてこんなにゴブリンに遭遇するんだああああああああああああああ！」

この者は「薬使い」行く先々でゴブリンと出会う男。

薬使いは辺境の地にある人口50人程の村で生まれた。母は薬師で父は農業を営んでいる。

彼はゴブリンを恐れていた。きっかけは6歳の時に聞いた村長が話す英雄の物語だった。全5章に分けられるこの物語の中で英雄が第1章の最初に倒すモンスター、それがゴブリン。

内容はゴブリンの群れが村を襲い、そこに偶然居合わせた英雄が数の暴力に苦戦しながらも勇敢に戦いゴブリンを退治するというものである。話を聞いていた村の子供達は英雄の活躍に目を輝かせていたが、彼が感じたのはゴブリンが持つ数の暴力への恐怖だった。

彼は不安だった。ゴブリンは実在する。この村も襲われてしまうのではないかと。不安になり過ぎて眠れずその日は両親のベッドに潜り込んだ。

事情を聞いた両親に「大丈夫よ」「ゴブリンなんて父さんが退治してやる」と抱きしめられて眠った。

しかし、彼の中の恐怖は完全には消えず、その数年後に起きた出来事が彼のゴブリンへの恐怖は更に大きなものへしていく。

その日、8歳になつた彼は母の薬の配達について行つた。少し遠く街で、往復すると4日ほどかかる場所だった。

問題が発生したのは帰り道。行きに通つた村の一つがゴブリンに襲撃され壊滅していたのだ。襲撃したゴブリンは村の生き残りが依頼した冒険者達により駆除されたらしいが、村にはまだ埋葬されていない村人達が地面に横たわっている。

彼はその場で嘔吐し、その小さな頭で理解した。ゴブリンがどれほ

ど危険な存在かを。

そしてその危険がいつ自分達に降りかかるてもおかしくないことを。

自分の村に帰った彼はその日から動き始めた。村中の大人に手当たりしだいにゴブリンの話をし、どうすればいいか相談した。

ゴブリンの危険を知るものは真剣に話を聞いてくれたが、若者達は完全にゴブリンを舐めていて最初は話も聞いてもらえない。

しかし、彼は何度も若者達のもとを訪れ、壊滅した村の話をした。〈その村にも若者が複数いたこと、その若者達がゴブリンに挑んだが数の暴力に太刀打ちできずに呆気なくやられてしまったことを〉初めは適当に聞いていた彼らも何度も話を聞き、ゴブリンの本当の力を知つたことで真剣に考えるようになつていった。一人の子供の行動が村全体の意識を変えていったのだ。

村は徐々にその姿を変えていく。村の入り口には大きな扉がつけられ、周囲に柵が何重にも敷かれて徐々にその数を増やしていく。時間を見つけては村の人達が作業をした成果である。

あの事件から2年、ゴブリンに恐怖する少年は10歳になり個人の戦う力を求め出す。彼は初めに体を鍛え武術を習い始めた。

しかし、彼の才能は平均より少し上程度で彼の目標である複数のゴブリン（あの村を壊滅させたゴブリンは30匹程らしい）に囮まれても余裕で突破できるようになるには最低十年の時間が必要と言われた。

そこで彼は別の方法を模索する。何日も考え続けて遂に閃く。きっかけは母の仕事の手伝いで薬の調合をしていたとき。「これ使いうによつては武器にならないか」と思い付いたのだ。その日から彼は武術と並行して対ゴブリン用の薬の開発を始める。

武術、薬の開発、両親の仕事の手伝いと時間は瞬く間に過ぎていき、5年の歳月をへて少年は戦闘スタイルを確立させる。そしてゴブリンを恐れる少年は成人し、旅立ちの時を迎える。

この物語は行く先々でゴブリンと遭遇し、戦うことになる薬師兼冒

険者の男の物語である。

## 第2話

「G O B E R !!」

「G O B !!」

（いくら何でも早すぎるだろう！）

森の中で薬使いは心の中で叫んだ。

薬使いが村を離れて数時間、ゴブリンを恐れる男はゴブリンと遭遇していた（その距離約30メートル）数は10匹。この数なら近くの村の農作物と女を狙つてことだと予想される。

堅固な守りとなつた故郷の村を出るからにはゴブリンとの遭遇率が上がることは薬使いも覚悟していた。会いたくないがどこかで会ってしまうのはしかたない。そう自分に納得させて旅にてた。しかし、それはあまりにも早く訪れる。

目の前には緑の皮膚をした人型の魔物。大きさは人間の子供程度であるが、その手にはナイフや棍棒などの武器を持っている。薬使いを見るゴブリンの目は餌かおもちゃ見るかの様な下衆で不快なものだつた。

それを見た薬使いの内心に嫌悪感と恐怖が7：3で渦巻く。しかし、対ゴブリンの為に鍛えた体は考えるより早く反応してくれる。即座に腰のショルダーバッグに手を入れて中から丸い物体を二つ取り出す。そしてゴブリン達の足元に向かつて投げつけた。

丸いは物体に地面にぶつかると同時に弾けて煙を発生させる。煙は瞬く間に広がりゴブリン達を包み込み視界を白く染めていく。

「G O B !!」「G O R O G R !!」「G O E R !!」

煙の巻かれたゴブリンの内、何匹は煙から飛び出し、薬使いに襲い掛かろうと動きだが、ゴブリン達は薬使いの元に辿りことなかつた。近づく途中で倒れ動かなくなつたのだ。

「…………死んだか？」

薬使いはその場で少し待ち、ゴブリンが死んだのを確認して大きく息を吐き出す。

「あああああやつぱり何度戦つても恐えなああああ

薬使いがゴブリンと戦うのは今回が初めてではない。武術の師と共にゴブリン狩りを何度かしたことはある。しかし、彼がゴブリンに慣れることなく相も変わらず恐れていた。

「やはりこの毒だと完全に絶命するまで〇〇秒つてどこか、通常のゴブリンなら個体による時間差はないけど、もう少し改良を加えた方がいいかもな」

ブツブツ言いながらメモに毒の効果を書き込んでいく。彼がゴブリンに投げつけた物体の正体は毒煙玉。

彼のメイン武器の一つで、強い衝撃を与えると爆発し煙を発生させる。普段は腰の対衝撃バックの中に収納されているので暴発の危険はない。様々な種類があり、彼の長年の実験の成果である（失敗して何度も酷い目に合っている）

肘まである鉄甲で防御し、毒煙玉で攻撃するのが薬使いの基本スタイルである。

「こんなもんかな。行きますか」

メモを書き終えた薬使いは冒険者ギルドのある町を目指して再び歩きだす。ゴブリンに遭遇しないことを願いながら。

因みにその願いがどうなつたどうかは読書の皆様のご想像にお任せします（たぶん合つてます）

### 第3話

薬使いが故郷の村を出で7日。彼は冒険者ギルドがある辺境の町に辿りついていた。

「着いた…………着いたなあ…………うう涙があ」

街の入り口で泣いている男。誰かに見られようものなら変人認定されかねない姿だ。

だが、彼がこうなるのも仕方がなかつた。前話のゴブリン戦からこの辺境の街に着くまでの一週間。

彼がゴブリンと遭遇したのは実に4回。最初の1回を入れれば計5回の戦闘があつたのだ。（薬草の採取中に見つけたゴブリンの巣での戦闘や、乗せて貰つていた行商人の馬車がゴブリンに襲われて戦闘になるなど）

幸い大きな群れとはぶつかつていないが何度も繰り返せば誰だつて疲弊する。顔を見るだけで嫌悪感が沸く相手なら尚更だ。

「もしかして俺は（作者の所為で）ゴブリンと遭遇しやすい星の下に生まれたのか…………まさかな」

3話目にして世界の真実に気づきかけた薬使いだった。

知らない方が幸せな真実に気づきかけた薬使いだつたが気を取り直して目的地であるギルドに入つていく。

冒険者ギルド。そこは冒険者を管理する国営組織。主な仕事は依頼者から受けた依頼を難易度別に分け、それに見合つたレベルの冒険者に斡旋すること。

ギルドに人格と実力、功績を認められると等級が上がり、より難しく報酬の高い依頼を斡旋して貰えるようになる。

そのギルドの受け付けカウンターに薬使いは立つていた。

「ようこそ冒険者ギルドへー!ご用件をお伺いします」

受付の女性が笑顔で対応してくれる。

「冒険者登録をお願いします」

「冒険者登録ですね!こちらの用紙に必要事項の記入をお願いしま

す」

彼は用紙に必要事項を書き込み、受付嬢に渡す。

「確認します。性別は男性、年齢は15歳、職業は薬師さんですね。どうお呼びすればいいですか？」

「薬使いと呼んでください」

毒や薬を使う自分の戦闘スタイルを考えた結果、彼は薬使いと名乗ることとした。ここに正式に薬使いという名の男が誕生する。「わかりました。これからよろしくお願ひします。薬使いさん」

冒険者登録を済ませた薬使いは、ギルドに手数料を払つて空き物件を紹介してもらい、住む家を決めた。

住む家が決まった薬使いは次に神殿を訪れ、神官長に挨拶する。ついでにお金も寄付しておく。

「あなたに地母神の祝福があらんことを」

「ありがとうございます。お時間があるようでしたらもう一つお話ししたいことがあるのですがよろしいでしょか？」

「おや、なんでし「イヤアアアアアアアアアアアアア!!!」

神殿に女性の叫び声が響き渡る。神父と薬使いが駆けつけると身体中に包帯を巻いた若い女性が半狂乱になつて暴れていた。神官達が落ち着かせようとしているが、静まる様子はない。

「状況を説明しなさい！」

「はい！先日運ばれてきた女性なのですが、意識が戻つてしまふから突然暴れだしまして」

「あの子か……」

暴れている女性が棒状の物体を振り回しているため迂闊に近づくこともできない。半狂乱になつていても動きが様になつているところを見ると冒険者だと思われる。

「イヤー……イヤア……来ないでよ……ゴブリンの分際で！」

「また、ゴブリンか。胸糞悪いな」

女性の言葉から彼女がゴブリンの被害にあつたことが伺える。その場にいなくともゴブリンは薬使いを心から不快にさせる存在だった。

周囲が途方にくれている中、薬使いは女性に近づいていく。

「薬使い殿!? その子は半狂乱になつていてるだけです。暴力はいけませんぞ！」

「大丈夫ですよ。傷一つ負わせませんから」

薬使いはバックから小瓶入りの香水を取り出すと、中身を女性に向かってまく。広がった香りを吸つた女性は徐々にではあるが暴れるのを辞めていき、その場で崩れ落ちてしまう。

薬使いは女性がケガをしないように受け止め、彼女の状態を確認してから周囲の神官に預けた。女性は神官達に運ばれていくがもう暴れはしなかつた。

「薬使い殿。先程の香水はいつたい」

「あの香水には人の精神を安定させる効果があります。主に先程の女性の様に興奮状態の人に使う薬で、名は精安香といいます」

「精安香ですが、いやはやす「ぐいものですな。我々にも作り方をご教授願いたいくらいですよ」

神官長の言葉に嘘はない。実は先程の様な騒動は神殿ではそう珍しいことではない。

神殿に入る人の中には心に深い傷を負っている人も少なくない。彼らはどうしても精神不安定になりやすく、本人の意思とは関係なく問題を起こしてしまう。それを一時的にでも鎮められる薬が手に入ることはとても重要なことなのだ。

「よろしければ条件付きでお教えしますよ」

「本当ですか!？」

薬使いは神官長に、先程言いかけて中断した話をし始める。

精安香に加え、〈即効性の睡眠作用がある催眠香〉と〈様々な毒に効果がある解毒香〉のレシピを教える代わりに、その3つの材料である植物達を神殿で育て薬使いに安価で売つてもらいたいというものがつた。

神殿からしても悪い話でない上に3種類のレシピは是非とも欲しいものだつた。これが有れば多くの人達を助けられるからだ。しかし、神殿としては特定の相手と取引するのは、彼らの在り方としては

望ましいことではないのも事実。神官長はかなり悩んでいたが。

「わかりました。その提案を受け入れましょう」

「ありがとうございます。これからも神殿のお役に立てそうな薬が出 来たら持つてこさせてもらいます」

神官長は神殿の在り方ではなく、これまでに傷ついた人達とこれか ら傷つく人達の救済を優先したのだ。

「薬使い殿、貴方とは長く、良いお付き合いを出来ることを願つておりますぞ」

「私もです。今後もよろしくお願ひします」

交渉を終えた薬使いは神殿を後にする。建物を出るときに転倒し そうになっていた金色の髪で10歳くらいの少女を助けたが彼女と 本格的に関わるのはもう少し先の話。

## 第4話

薬使いが冒険者なつてから1ヶ月。彼は相変わらずゴブリンと（望まぬ）戦いを繰り広げていた。

魔物討伐の依頼の帰りにゴブリンと戦い、貴重な薬草の採取依頼の最中にゴブリンと戦い、盗賊討伐の依頼に行く途中でゴブリンと戦い、ゴブリンの討伐依頼では当然ゴブリンと戦つた。

「この報告書、虚偽ではないですか……よね？」

薬使いの報告書を見た新人受付嬢は苦笑いする。報告書に書かれていた内容は依頼の下級魔物3匹の討伐報告と、帰る途中に襲つてきたゴブリン20匹の討伐報告書だつた。

「虚偽ならどれだけ良かつたか……誰がこの現実を虚偽にしてくれ」

「あはは……薬使いさんのゴブリンの討伐数。そろそろ300を超えますね。それも依頼外の討伐数で……いつそゴブリン討伐数のトップを目指しますか？」

「笑えない冗談はやめてください。何より笑えないのが、このまま行くと目指す目指さないに関わらずトップなれそうなのが笑えない」「ごめんなさい。私もそう思います」

頭を抱える薬使いと苦笑いをする新人受付嬢だつた。

「良し立ち直つた！くよくよしてもしようがない。次の依頼だ依頼！まずは目指せ黒曜！依頼ボードを見てきます！」

冒険者の階級は白金、金、銀、銅、紅玉、翠玉、青玉、鋼鉄、黒曜、白磁の十段階あり、薬使いはまだ最下級の白磁である。

「そつそつですね。薬使いさんならすぐに昇格できますよ。それに今度はゴブリンと会わないかもしま、あつ！」

何かを思い出す新人受付嬢。

「どうかしましたが？」

「いついえゴブリンと聞いて、先程ゴブリン討伐に行かれた新人の冒険者さんを思い出しまして」

「新人がゴブリン討伐ですか。言いたくないですけど珍しくもないで

すね……無事に帰つてこれるといいんですが

ゴブリン討伐の報酬は安い。依頼者の殆どが小さな農村であるからだ。普通に暮らしていくのがやつとの農村に高い報酬を出す余裕など何処にもないのだ。それ故にゴブリン討伐には駆け出しの白磁のパーティーや挑むことが多い。

「それで何か印象に残るパーティーダつたんですか？」

薬使いのぶつ飛んだ報告書を見た後でも思い出せるくらいなのだから、印象に残る何かがあると薬使いは推察する（ぶつ飛んでいる自覚は有るんです）

「その…………パーティーよりないです。お一人で行かれたんですね」

「…………そつ装備は!?俺みたいに変わった装備をしてるとか」

「登録された時は何も持つていませんでした」

「そうなると依頼を受けてから買いに行つたのか…………やばいですね」

ゴブリンが弱い魔物であることは多くの人が知つてゐる。体は小さく、力は子供並。知能も低い。武器を持つた成人男性ならまず負けることないだろう。

しかし、それは単体での話。ゴブリンは基本的に群れで行動し、敵を見つけると四方八方から襲い掛かる。普通に生活して四方八方から襲われた経験のある人は少ない。それ故に多くの新人冒険者はこのゴブリンの攻撃に対応出来ずに命を落とす。うまく切り抜けたとしても無傷とはいかないだろう。

ここで問題なのは、ゴブリンが武器に毒を塗つてゐることだ。この毒がかなり厄介で掠つただけでも重症化することもある危険な毒なのだ。更にゴブリン討伐は基本的に奴らの巣で戦うことになる。

ただでさえ厄介なのに戦う場所は相手のテリトリー。ゴブリン討伐は安い報酬で経験のない者が、数の暴力に晒されながら圧倒的な不利な場所で戦わなければならぬという、ある意味最悪の依頼なのだ。

「あの…………よろしかつたら、ええつとお…………何でもないです」

冒険者の基本は自己責任、死のうが生きようがそれに他人が介入す

ることは望ましくない。例え助けにいつても危険な目に合うだけで一文の得にもならないのながら、進んで助けに行く人は余程のお人良しか正義感に溢れるものだけになる。

それ故に新人受付嬢は口から出かけた言葉を飲み込んだ。しかし、彼女のこの行動は無駄ではなかつた。

「依頼の場所はどこですか？」

「いつ行つていただけるのですか!?」

この男、薬使いは基本的に善人である。それにこれは運の良い悪いのレベルを超えていた。このままでは討伐に向かつた冒険者は高確率で死ぬことになる。彼は助けられる命なら助けたかつたのだ。

「パーティならともかく、1人は流石にやばそうなので行つてきます」

「ありがとうございます！」

薬使いは新人冒険者が受けたという依頼の場所に向かつた。

薬使いが洞窟の前に着いた時、そこには傷だらけの男が立つていた。ゴブリンの死体の山と共に。

「あの、生きてますか」

「誰だ？」

薬使いが話しかけると男は反応する。どうやら生きてはいるようだ。

「あなたと同じ冒険者です。ゴブリンの巣に1人で向かつた冒険者がいると聞いて、様子を見にきました」

「なるほど、問題ないが感謝する」

「いやいや、どう見ても重症ですよ。応急処置しますからそこに座つてください」

男は鎧や兜の上からでも分かるほど出血していた。

「だが、まだ中にゴブリンがいる」

「見たところ、群れのボスはあなたの倒したシャーマンです。ボスが

いなくなつたんですから、すぐには動けませんよ。ホブも死んでます  
しね」

先程は記述しなかつたがゴブリンの群れの中には上位種と呼ばれる進化したゴブリンがいる事がある。

「魔法使いでそこそこ頭が回るシャーマン」こいつが群れのボスである事が多い。

「ゴブリンが先祖返りなどをして大型になつたホブゴブリン」こいつはその体の大きさから分かる様に強い腕力を持つており、当たり所次第では一撃で人の命を奪うこともできる。

こいつらがいるだけで討伐の難易度を大きく上げる厄介な存在である。

「それに治療中でも決して油断しませよ」

薬使いはゴブリンの巣である洞窟の入り口に小さな袋を置いた。

「それは何だ？」

「匂い袋です。人間には少し臭いくらいですが、鼻が利く生物には不快な匂いとなります。本能に忠実なゴブリンなら匂い元にはまず近づいてこないでしよう。まあ座った座つた」

薬使いは男を座らせて症状を見ていく。

「よくこの体でシャーマンとホブを倒しましたね。普通なら痛みで動くのすら辛いでしよう……毒も受けてますし」

解毒香を吸わせ、鎧と兜を外した体に止血軟膏を塗っていく。5分ほど掛けて全身の傷の応急処置を済ませた薬使いはその場で立ち上がり男を見る。

「応急処置が終了しましたけど、どうですか？」

「問題ない」

「何故でしょう。あなたの〈問題ない〉はイマイチ信用できない」

先程の状態でも問題ないと行っている時点で信用度が低いのは仕方なかつた。

「治療は感謝する。俺は残りのゴブリンを皆殺しにしてくる。おまえはどうする？」

「せつかく来たので最後まで見ていきますよ。ないと思いますが、こ

の後に死なれたりしたら流石に気分が悪いですしね

「そうか」

洞窟に入ると男が倒したゴブリン達の骸が転がっていた。その骸に男は無言で刃物を突き刺して確実に息の根を止めていく。この行動はゴブリンの得意技である〈死んだふりからの奇襲〉を防ぐ効果がある。

そして2人は洞窟の最深部に辿り着く。そこには三四の子供ゴブリンが身を寄せ合つて震えていた。

「…………」

薬使いは無言で男の背中を見ていた。殺すか見逃すか。この後の行動次第でこの男が今後、ゴブリンと戦つていけるかどうかが判断できるからだ。

男は少し止まつて何かを考えていたがゆつくりと動き出す。手に待つていた剣を三回振り下ろし、許しをこう様に手を組んでいた子供ゴブリン達の命を絶つ。

一見何の罪もない子供ゴブリンを殺す残酷な行為だが、ここで殺さない方が本人に取つても、他の人に取つても酷いことになることが多い。

これは知らない者が多い事実で、ゴブリン討伐をするなら知つておかなければならぬ事もある。

見逃されたゴブリンの多くが最初にすること、それは見逃した人間を後ろから奇襲することだ。これにより多くの心優しい冒険者が命を落とすことになる。ゴブリンは見逃して貰つた恩など一ミリも感じない。感じるのは人間への怨みだけ、それがゴブリンである。

そして奇襲に成功し、その後も生き残ったゴブリンはその多くが知恵や力を持つ上位種へと進化する。そして一般人を襲い、討伐に来た冒険者を返り討ちにして被害が拡大させていくのだ。

ゴブリンは子供だろうと皆殺しにしなければならない。見逃した本人とその他の人達を守るために。そういう点では男はゴブリン討伐に向いているのかもしれない。

「終わった」

「お疲れ様です。では帰りましょう」

「ああ」

2人はゴブリンの巣だつた洞窟を後にした。

卷之三

ゴブリン討伐の帰り道。彼らは牧場の近くを歩いていた。

「え、  
まな  
し」

「いいえ、街まで一緒にいかない？」

薬使いは、傷の影響で動きの鈍い男を送つて行くことにした。そんな二人が牧場の近くを通りがかつた時、牧場側から1人の人物が飛び出して来た。長い髪で片目を隠している内気そうな女の子だつた。

薬使いはすぐに少女が見ているのは自分でなく、連れの男のことであるのことを理解し、後ろに下がつて男と女の子が話すのを見守る態勢に入った。

どうやら男は行方不明になつていて、その子の幼馴染らしく、男の生存に涙を流して喜んでいた。その後も男と話していた彼女は、突然牧場の建物の中に入つて行つた。その隙に薬使いは男に近寄る。

きますから、彼女としつかり話してあげてください」

「了解。またギルドでー

薬使いは男と別れ、  
帰路についた。

おまけ

ギルドに報告していた薬使いはあることに気づく。

「そういえば、あの人の名前聞いてないな」

名前がわからないので報告書を書くのにすこし苦労した薬使い

だつた。

## 第5話

薬使いは教壇に立っていた。

場所は神殿、周りにいるのは神殿所属の少年、少女たち（年齢10歳～14歳）、手に持っているのは薬の材料となる花、目の前の机には調合に必要な器具。

薬使いはこの場所で講師をやっている。

「以上が解毒香の調合時に気をつけなければならないことです。それでは皆さん、実際にやって見ましょう」

「「「はい！」」」

薬使いが何故この様なことをしているのか、それは3週間まで遡る。神官長がわざわざ彼の元を訪ねてきたのだ。内容は神殿で薬品調合の講師をして欲しいとのこと。

詳しい話を聞くと、薬使いが調合の基礎を指導した数人がレシピを見て再現できる様になつたらしく、患者にも良い効果が出ているとのことだ。

神殿としてはこの調子で調合ができる人を増やしていきたいらしい。しかし、ここで問題が発生する。神殿で調合できる人数はまだまだ少なく、必要な患者の分を作るので精一杯で人に教えている時間的余裕がないのだ。

それに加えて自分ができるのと人に教えられるのかは別の問題。何とか絞り出した時間を使つて教えようとすると、作る側としての経験もまだ足りず上手く教えられなかつたそうだ。

そこで白羽の矢が立つたのが薬使いである。作った本人である薬使いなら上手く指導できるのではないかと考え、頼みにきたのだった（ギルドを通して依頼を出すので実績にもなるそうだ）

薬使いは了承し、週2で神殿に教えに来ることになった。

「1班は良い調子ですね。3班はもう少しゆっくり混ぜてください。5班は……えつと頑張りましょー！」

薬使いは成人前の世代を中心に20人程を教えている。彼らが成人したときに選べる選択肢を一つでも広げてあげて欲しいと神官長

に頼まれたからだ。

参加を希望するだけであつて生徒達は皆、真面目なので薬使いも気分良く教えることができている（初日はガチガチに緊張しており、自分に精安香を使用したことを記述しておく）

「本日はこれまでにします」

「「「ありがとうございます」」」

「お疲れ様です。今日は夕方まで神殿にいるので質問がある人は探して聞きたくください」

授業を終えた薬使いが教室を後にし、神殿の中を歩いていると後ろから声をかけられる。

「せつ先生！ご質問したいことが！」

薬使いが振り返るとそこには金色の髪で10歳くらいの少女が走り寄ってきていた。薬使いは笑顔で対応する。実はこのやり取りは頻繁に行われている。

「今日も質問か相変わらず真面目だね」

「はい！少しでも人の為になる事を学びたいです」

少女は薬使いの教え子の中でも特に真面目で、純粋に人の役に立ちたいと思える思想の持主だった。

「うん。偉い偉い。君みたいな生徒のためならいくらでも時間を裂こう」

「あつあの、はつ恥ずかしいです」

少女の頭を撫でる薬使い。何度も話している内に無意識に撫でてしまふようになつたのだ。少女は恥ずかしそうに顔を赤くするが振り払つたりはしないで受け入れている。その少女の様子を見る薬使いの表情はとても穏やかだつた。そして内心では

「（精神が……いや、魂が浄化されていく様だ）」

癒され、心が表情以上に穏やかになつていた。

命がけであることも多い冒険者の仕事。それだけでも精神的ストレスは溜まるのに、薬使いは会うだけで不快な気持ちになるゴブリンと頻繁に戦っているのだ。ストレスが溜まらない方がおかしい。

ゴブリンの精神は残忍で不純、それに対しても少女は慈悲深く純粹。薬使いはゴブリンと真反対の精神を持つ少女に癒しを感じていた。

「つてことだけどまだ、質問はあるかい？」

「大丈夫です。ありがとうございました！」

「お役に立てて何よりだ。それでは「あつあの先生、授業とは関係ないことでも聞いても良いですか!?」

「構わないよ。先程言った通り、時間はあるからね」

「でしたら冒険者について教えてくださいませんか?」

「冒険者の話か……わかつた。教えよう」

どうやら彼女は冒険者に興味があるようだ。薬使いは少女に冒険者の夢と現実（後者は少しオブラートに包んで）を話した。  
「やつぱり冒険者は大変な職業なのですね」

「そうだね。大変なのはどの仕事でも一緒だけど、冒険者はそれに加えて命の危険がつきまとから、なるならよく考えてから決めるべきだね」

「分かりました。兄さん！」

冒険者について話を終えると少女の口から驚愕の呼称が飛び出す。

「ぬ? 今何て呼んだ」

「あつ! すっすみません。先生と接していたら、私に兄がいたらこんな感じかなと思つてしまつて咄嗟に……」

少女の呼称に薬使いは数秒沈黙した。そして

「兄さん…兄さん……か、悪くないな」

口の中で繰り返す薬使い。その表情はとても嬉しそうだった。

「え?」

「うんうん、これからもそう呼んで欲しいくらいだよ。それにこんな可愛い子が妹になつてくれるなら、これ程嬉しいことはそうはないな」

薬使いは珍しく豪快に笑つて喜んでいた。

「でつでしたらこれからも兄さんで」

「ああ、よろしく義妹よ」

「よろしくお願ひします。兄さん!」

少女は顔をうつすら赤くしながら笑顔で受け入れる。こうして薬使いに血の繋がらない兄弟ができたのだつた。

数年後、少女は奇跡と薬（治療系）を操る神官になるとなるがそれは少し先の話。

妹ができた次の日。薬使いがギルドに顔を出すと、賑わつてゐる筈のギルドがいつもより少し静かで変な空間が出来てゐること気づいた。

薬使いが近づいて見ると空間の中心に1人男が立つてゐた。見覚えのある兜だつたので薬使いは男の前に立つた。

「おお、久々だな。怪我は治つたのか」

「お前か、問題ない」

空間の中心にいたのは、少し前に1人でゴブリン討伐に行つた男（以後スレイと呼称）だつた。見た所、怪我はしていない様だがスレイの鎧に血がべつとりと付着しており匂いも強かつた。

「えつとその血はゴブリンの血か」

「ああ、俺はゴブリンについて何もしらない。だから解体した」

「なるほど……ええつと、解体するのは良いけど、せめて血は落としきた方がいいな。他の人の迷惑だから」

薬使いは血の匂いを中和する香水をスレイに振りかける。心なし  
か周囲の視線もましになつた様に感じられた。

「善処する」

「そうしてくれ。それで今日はもう帰るのか？」

「そうするつもり」

「なら、しつかり休めよ。〈休息を取らなかつたから動きが鈍つて死にました〉じや同情すらできないからね」

そんなんで死なれたら、流石に再会したばかりのスレイの幼馴染が

可哀想だと思つたからなのは口に出さない薬使いだった。

「そうだな」

スレイがギルドの入り口を出たのを見た薬使いは、これなら大丈夫だろうと思い、受付カウンターに向かおうと体の向きを変えた。

その瞬間、ギルドの扉を乱暴に開けて入つてくる人物がいた。年齢は40代程で服装から見るに農夫だと思われる。農夫はそのまま受付に行き、報酬の入つた袋を机に置き叫んだ。

「村かゴブリンに襲われた！報酬は出す。頼むから助けてくれ！」  
「ゴブリン討伐の依頼ですね。こちらに必要事項を書いてください」「わかつとる。わかつとるから早く誰かを派遣してくれ！」

農夫の状態を見るに状況はかなり悪いらしく、焦りながらも必死に必要事項を書いている。それを見ている新人受付嬢は内心どうすべきか考えていた。

例え農夫が書類を書き終えてもゴブリン討伐を受けてくれる冒険者がこの場にいるかわからないからだ。

「書き終えた！早くオラ達の村を！」

「確認します。えくと「ゴブリンか？」あつはい」

新人受付嬢はこれだけ切羽詰まつている農夫に「必ず冒険者が行きますからお待ちください」とマニュアル通りのセリフを出すことに躊躇してしまった。

そこに声を掛ける者がいた。帰つた筈のスレイである。それを見ていた薬使いは頭を抱える。

「まだ、帰つてなかつたか」

「ゴブリン討伐なら俺が受ける。場所は何処だ？」  
「○○村だ！」

農夫は受付嬢が口に出すより、村の場所を教える。

それを聞いたスレイはギルドの出入り口に向かつて歩きだす。その道を薬使いが塞ぐ。

「ストップ。帰るんじやなかつたのか？」

「だが、ゴブリンだ」、

「今日のゴブリン討伐は2回目だ。実践慣れしてないのに、日に2

回もゴブリン討伐に出たら本気で死ぬぞ」

「しかし、ゴブリンは放置できない」

薬使いは説得を試みるもスレイが引く様子はない。そこで薬使いは（やりたくないと思いつつ）最後の手段に出る。

「なら、俺が受ける。それなら文句はないだろ」

「だが、「300匹越え。俺が一人で倒したゴブリンの数だけは本当か？」

「嘘だと思うなら受付で聞いてみてくれ」

仮スレが新人受付嬢を見ると、彼女は何度も大きく頷いた。

「現状なら俺のほうがゴブリンを狩れる。それならあんたが無理にでる必要ない」

「……わかった」

スレイをなんとか納得させた薬使いは依頼を受理してもらう為に受付に向かう。

「依頼の受注をお願いします」

「はい！確かにすぐに受理します」

薬使いの実績を知っている新人受付嬢は素早い動作で依頼を受理する。

「農夫さん。村の場所はわかるので先に行きます」

「わかった。オラ達の村を頼む！」

農夫も先程の薬使いのゴブリン討伐数を聞いていたので、一人でも文句も言わずに了承する。彼はギルドを急ぎ足で後にした。

「場所は〇〇村。鉱山の近くか」

この後、薬使いはこのゴブリン討伐が原因で、もっと面倒な魔物と遭遇することになるのだった。

## 第6話

鉱山近くの村で薬使いは大量のゴブリンとの激しい闘いを繰り広げている。

「GYO!」「GYANGYAR!」「GYOOOOO!」「GOOGYA R！」

薬使いが来た時点で村は半壊していたが亡骸は少なかつた。疑問に思った薬使いが村を探索すると、この規模の村では珍しい2階建ての、どこか品のある建物を數十匹のゴブリン達が囮つていた。

遠目から見ても他の家より頑丈そうで、村人は中に立て籠もつているようだ。しかし、建物がいくら頑丈でも窓や扉を壊されれば、ゴブリン達に侵入され中から崩壊してしまう。

今は立て籠もつた村人が窓や扉の隙間から、先の尖った棒でゴブリンを牽制しているが破られるのも時間の問題だつた。

ゴブリン達に気づかれないように風下から近づき、煙玉の射程範囲

まできた時点で薬使いはあることに気づく。

「こいつら……遊んでやがるのか……本当に胸糞悪いな」

ゴブリン達は遊んでいる。村人達がいつから立て籠もつてているか不明だが、これだけのゴブリンに囮まれていては建物の損害が少ない様に見える。

それはゴブリン達が立て籠もつている村人で遊んでいるからだ。ワザと少ない数で建物を襲わせて必死で抵抗する村人達を見て楽しんでいるのだ。ゴブリン達が本気で動けば薬使いが来る前に建物が崩壊していく可能性もある。

「これは魔物討伐じゃないな。これは害獣駆除だ」

ゴブリンは出会つたら必ず駆除しなければならない生物だと再認識した薬使いは動きだす。まずは基本戦法での数減らしを始める。方法は単純明快で、

ゴブリンを見つける→毒煙玉を投げつける（毒の種類によるが大抵はここで死亡）→（生きていても動きが鈍るので）近づいて頭を潰し

確實仕留める→終了。

不意打ちで毒煙玉を受けたゴブリン達はその場で倒れるが、これだけ数が多いと毒の範囲から逃れるものや、倒れた仲間を見て毒が来る前に息を止めて生き残るゴブリンが出る。

未来のスレイが語る「ゴブリンは馬鹿だが間抜けじゃない」はその通りで、仲間か倒れた→毒だ→息を止めろ→息を止めていれば効かない。それくらい判断はできる知能は持っているのだ。そして生き残ったゴブリンは煙玉を投げた薬使いに襲い掛かる。

それに対し薬使いは、牽制用の毒煙玉を投げた後、ショルダーバッグから小瓶を取り出して吸い込み始める。

その間に煙から抜け出した5匹は薬使いの近距離まで迫る。「仕留めた！」とゴブリン達は思ったことだろう。しかし、その一瞬後にゴブリン達は火達磨になる。

ゴブリン達は何が起こつたのか分からなかつた。完全に仕留められる距離まで近づいた。後は頭を殴つて滅多刺しするだけだつたはず、それなのに何故か自分達は火達磨になつている。

ゴブリン達も何も見えていなかつたわけではない。しかし、理解できなのだ。人間（薬使い）が炎を吐いて自分達を焼いたという現実が。

炎に焼かれたゴブリン達は何も理解できないまま、その生涯を終える。

使われた香水の名は火炎香。この香水を吸い込むと生物の体内にある物質と反応して炎を発生させ、体内から生物を焼くことができ。また、適量吸い込むことで口から炎を吐くことも可能。「黒焦げになつて終わつてろ。次」

毒煙玉から生き残り、まだ薬使いに接近していなかつたゴブリン達は恐怖し硬直してしまう。見ていたゴブリン達ですら人が炎を吐くなどいう、非現実的な現象は知らないし理解できないからだ。

こうなつてしまえば、後はただ薬使いに狩られるだけの存在に成り下がる。しかしここで硬直していないゴブリンが一匹だけいた。ゴブリン達のボスであるゴブリンシャーマンだ。

シャーマンは薬使いがゴブリン達と戦っているうちに村人の立て籠もる建物の扉を壊し、1人の女性を引きずり出す。シャーマンはそのまま、女性を自分の盾にするかの様に薬使いに向かつて突き出す。

その顔は勝ち誇っている。このシャーマンは知っているのだ。人間、特に冒険者の多くが人質を取られると攻撃できなくなることを、「人質の命が惜しければ動くなと……本当に下衆だよな。ゴブリ

ンって」

ゴブリンに人質を取られて、動けなくなつたところを殺される冒険者は少なくない。問題なのはそれが白磁以上の冒険者であつても起これりうる点だ。

実力があり油断もしなかつた彼らがゴブリンに人質を取られただけでやられてしまつた理由。その大きな要因の一つにギルドの行う昇級審査がある。

冒険者が昇級するには報酬金額、貢献度、人格が一定の基準を満たしていなければならぬ。特に人格は重要で昇級審査の度に厳しくチェックされる。少しでもおかしい点があれば「看破」の奇跡を使つて嘘を見抜く徹底振りだ。

そうしていくと、等級の高い冒険者程、人格的に優れていることになり、高い信頼を得ることができる様になる。しかし、この優れた人格がゴブリンに人質を取られたこの場面だとマイナスに働く。酷いことを言つてしまえば人質を見捨てればこの状況を簡単に突破できる。

人質を優先した結果、冒険者が殺されてしまえば冒険者だけでなくその冒険者の手によつて助けられるはずだつた人達の未来まで奪うことになる。

数の上では完全にマイナスになつてしまふ。しかし、ここで簡単に人質を見捨てられる冒険者にこれ以上の昇格は難しいだろう。人格面で問題があると見なされる可能性はあるからだ。

そういう意味でもゴブリンは冒険者に取つてたちの悪い魔物なのだ。

シャーマンが人質を取つたことで怯えていたゴブリン達も戦意を

取り戻し、薬使いにじり寄つてくる。抵抗できない薬使いを躊躇殺しにするつもりなのだ。

薬使いは大きくため息を吐き、目を閉じる。諦めたと考えたゴブリン達は下衆な笑い声を上げる。

しかし、ここでやられる薬使いなら今までのゴブリン討伐でとつくり死んでいる。目を開けた薬使いの纏う感情は、何時もの恐怖込みの嫌悪感ではなく、氷の様に冷たい殺意を感じさせるものだった。

薬使いは小瓶を取り出して中身を吸い込む。ゴブリン達は無駄な抵抗でもするのかと少しだけ身構える。しかし、ゴブリン達の行動は無駄に終わる。何故なら身構えたところで何の意味も無いからだ。

ゴブリン達の視界から薬使いが突然消える。それはシャーマンとて例外ではなく、完全に薬使いを見失つて周囲を探してしまった。

そんなシャーマンの後ろに迫る影があつた。影にシャーマンが気づいた時にはもう遅く、シャーマンの顔面に薬使いの蹴りが叩き込まれる。

蹴り飛ばされたシャーマンは何度もバウンドした後の地面に叩きつけられ完全に動かなくなる。蹴られたシャーマンの顔面は大きくひしゃげていて蹴りの威力を物語つていた。

「消えろ下衆どもが」

人質の安全を確保した薬使いはその後も高速で動き続けた。頭を碎き、首をへし折り、その場にいたゴブリン達の命を一匹残さず刈り取つてようやく動くのを止めた。そしてその場に座り込みながら解毒香を吸う。

「数分でこの負担……やっぱりきつい」

薬使いが使つたのは、彼の切り札の一つに数えられながら、身体への負荷から滅多に使うことのない強力な香水。

名を加速香、吸い込む度に使用者のスピードを倍に跳ね上げる強いドーピング剤である。しかし、身体への負荷が大きく。一吸いなら20分、二吸いなら10分と使用時間に制限がある。

それ以上に続けて使用すると身体に様々な症状が現れて最終的に使用者は死に至らしめる。効果を解除するには解毒香を吸うしか方

法がないなどかなり危険な香水もある。

数分後、加速香の効果の消えた薬使いは立ち上がり、立て籠もつていた村人たちにゴブリン討伐の報告をする。

薬使いは大いに感謝された。しかし、問題はこれで完全に終わつたわけではなかつた。薬使いが念のため村中を見て回り、ゴブリンがないか調べたところ、ゴブリンが逃げたと思われる痕跡を発見された。

「数は一匹か、追つてみるか」

逃げ延びて上位個体に進化されても困るので村の人々に事情を話し、薬使いは逃げたゴブリンの追跡を始める。

追跡を続けた結果、薬使いは鉱山の洞窟に辿り着く。追跡途中に気づいたことだが、逃げたゴブリンは薬使いの毒を少量ながら吸い込んでいたらしく、足を引きずつて歩いている様だ。おかげで引きずった跡が残るので追跡しやすかつた。

「洞窟か、いい予感がしない……」

本人は気づいていないが、彼の勘は嫌な時程良く当たつている。この勘からくる強い警戒心が彼をこれまで生き残らせた理由の一つである。

薬使いが警戒しながら洞窟を進んで行くと、ある地点でゴブリンの足跡が消える。何の前触れもなく突然にだ。周囲に隠れられる場所も存在しない。周りを注意深く観察していると布の切れ端を発見する。

「ゴブリンの着ていた服の破片?……!!」

布の切れ端の正体を推察した瞬間、薬使いは全身の毛が総毛立つ様な感覚に襲われる。そして頭には撤退二字が浮かび上がる。それを実行しようとした時、洞窟の奥から複数の声が聞こえてくる。

「つたく、もう少しで最深部まで行けたのによお」

「休憩も大事なことですよ。疲れた状態では対応できないこともあります

ます

「私は疲れたよお」

「うむ、休憩も大事なことじゃ。洞窟の中では安心して休めんからの」  
洞窟の奥から現れたのは男戦士、半森人の少女野伏、鉱人の戦士、知識神の僧侶の四人パーティーだった。彼らは最近発足したパーティで薬使いも見覚えがあつた。

「お、あんた確か薬使い！こんな所でなにやつてんだ？」↑男戦士  
「貴方も依頼ですか」↑僧侶

男戦士は薬使いを覚えていたらしく、フレンドリーに話かけてくる。普段の薬使いなら明るく対応する所だが、今の彼にはそんな余裕は力ケラもない。全神経を周囲の警戒に回している

「あの、どうかしたんですか？顔が強張つてますよ」↑野伏

「何かいる……ヤバイのが」

「何かつてブログが？それなら俺たちがかなり倒してぜ」↑男戦士  
「ブログ

スライムの様な姿でその身体は腐食液でできている。攻撃方法は単純で、その身体を利用して体当たりをかまして敵を溶かす小型の魔物である。腐食液でできた身体こそ危険だが適切に対処すれば簡単に倒せる新人向けの魔物でもある。

「違う…………そんな小さな魔物じゃない」

形跡を殆ど残さずゴブリンは消えた。それを可能するにはある程度の大きさが必要であり、ブログではそれは不可能。別の魔物が潜んでいることになる。

「気の所為ではないか？ワシらは洞窟の半分程まで進んだか、そんな魔物はおらんかつたぞ」

鉱人の戦士の言葉を聞いても、薬使いはまつたく警戒を緩めない。それどころか加速香を取り出して一吸いし、いつでも動ける体勢を取りつていた…………そしてそれは起こつた。

半森人の少女野伏、彼女の真上の天井に僅かヒビが入つたのだ。  
「野伏！その場から離れろ！」

「え？」

薬使いが声を上げるが気を抜いている野伏は反応できない。それを理解した薬使いは加速香によつて得たスピードを全開で使い、野伏に接近する。その数瞬後、野伏の真上の天井が割れ、巨大な何かが降つてくる。

野伏がその何かに呑まれる寸前で、薬使いが彼女を抱えてその場を退避する。野伏を飲み込み損ねた巨大な魔物はすぐにその場を離れ、岩を碎きながら地面に潜つて行く。

「い…………今のは……」 → 男戦士

「ロツクイーターです!!」 → 僧侶

ロツクイーター

岩の様な甲殻を纏う百足に似た巨大な魔物。岩を主食とするが、それ以外の生物にも躊躇なく襲い掛かり、その大きな顎で捕食する極めて凶暴で危険な魔物である。

「どうするじゃ！リーダー!?」 → 鉱人の戦士

「俺にも分かんねえよ！」 → 男戦士

「皆さん。落ち着いてください！」 → 僧侶

「…………」 → 野伏

全員大混乱である。薬使いですら予想を上回る事態に反応出来ず、野伏を下ろした後、その場で動けなくなつてゐる（警戒は続けてゐる）この場にいる全員がこうなるのも無理もなかつた。本来ロツクイーターは数十人単位の徒党を組んでやつと倒せる魔物。この場にいる全員がいくら足搔いても、勝つのは不可能。

「男戦士、とにかく撤退だ。ロツクイーターが潜つているうちに洞窟を脱出しよう」

最初に混乱から回復したのは薬使い。精安香を一気に吸い、無理矢理冷静さを取り戻したのだ。

「そつそつだな！みんな出口まで走れ！」

その場にいる全員が出口に向かつて走り出した……恐怖で硬直している野伏を除いて。彼女は見てしまつたのだ。ロツクイーターの口の中を。

ロツクイーターの口の中には、薬使いの追つていたゴブリンが無残

な亡骸となつて入つていた。

それを見た瞬間、野伏は理解する。薬使いに助けられなかつたら、自分もあの中にいた事を。その事実とあり得たかもしれない自分の最後に、彼女は完全に硬直してしまつたのだ。

「何をやつてる。急げ！」

男戦士が叫ぶが野伏は動けない。そんな中、ロツクライーターは野伏を…………無視して男戦士に襲い掛かる。男戦士は咄嗟に動けなかつたが、薬使いが近くにいたおかげで彼に引っ張つぱられ回避できた。しかし、ここで悲劇が起ころる。

「かはっ!!」

捕食を回避されたロツクライーターは再び地面に潜ろうとする。この時、ロツクライーターは方向転換のため身体を大きく回転させる。問題のはロツクライーターの回転範囲に野伏がいたことだつた。彼女は跳ね飛ばされ洞窟の壁に叩きつけられる。

岩を碎いて進む様な馬鹿げた力を持つロツクライーターに、偶然とはいえ体当りされれば無事ではすまない。おまけに壁に勢いよく叩きつけられたのだ。野伏は遠目から見ても分かるほど重症だつた。

「急いで治療を！」↑僧侶

「この状態でか!? 無理じや！」↑鉱人の戦士

野伏がどんなに重症だろうとロツクライーターを止まらない。あの巨体が相手では治療のための時間稼ぎもできない。状況は最悪だつた。

「とにかく、脱出だ。彼女は俺が抱えてる！」

薬使いは野伏に素早く近づき、出来るだけ揺らさない様に抱えて走り出す。

この後、何度かロツクライーターの攻撃に晒されたが何とか洞窟を脱出できた。

洞窟から少し離れた所で薬使いと僧侶は野伏少女の容態を確認して治療していた。しかし、2人の表情は陥しかつた。

男戦士と鉱人の戦士は、それを離れた距離から見ている。治療は10分ほど行われ、立ち上がった二人に男戦士が寄つてくる。

「あの子の容態は!?」

「今、出来る治療は施しました…………ですが」

「何だよ。早く言えよ！」

「……………」

僧侶は沈痛な面持ちで沈黙してしまう。

「俺が言います。彼女は」

僧侶の様子を見兼ねた薬使いが代わりに口を開く。

男戦士は薬使いの口の動きがとてもゆっくりに感じた。それと同時に男戦士の中で、その先を聞いてはいけないと叫び声が上がった。しかし、その言葉は紡がれた。

〈彼女

は恐らく助からない〉

## 第7話

＜彼女は恐

らく助からない＞

「どういう…………と……だ？」

薬使いの告げた内容を男戦士は理解できなかつた。理解したくなかつた。

「野伏はロツクライーターに撥ね飛ばされてかなりの勢いで壁に叩きつけられた。身体は何か所も骨折しているし、そのときに頭もぶつけている。それだけでも人間が死ぬには十分な怪我だ。それに加えて、彼女が怪我を負つてから応急処置を施すまでに10分以上の時間が経過している。この怪我ならそれは致命的な差になりかねない」

たかが10分、されど10分。1分1秒で生死を分ける医療の中で10分の差はあまりにも大きかつた。

「だつたらあの場で処置していれば！ 「それをやつてたら確実に全滅だ。彼女も他のメンバーも全員まとめてロツクライーターの腹の中だ」  
.....」

薬使いの語る現実は男戦士にはあまりにも重かつた。

「あの状態で他に取れる選択肢なんてなかつた。例え、あの場で処置ができたとしても、俺の薬や僧侶の奇跡でどうにかなつたかは怪しい所だ。それだけ野伏の怪我は酷い」

薬使いの薬品で処置できるのはあくまでも外部の怪我まで。僧侶の回復の奇跡も重度の怪我人を治療できる程の力はない。

「現状、野伏の身体は奇跡的に生きているが、今後どうなるか分からない。助かる可能性もゼロではない…………ただ」  
「ただ…………何じや？」

薬使いは言いづらそうに告げた

「俺が知つてゐる事例で、野伏と同レベルの怪我を負つて助かり、意識を取り戻した者は…………殆どいない」

薬使いの医療知識は、彼の経験から得た知識に加え、薬師の母の知識、彼が訪れた村や町の医者の知識、その医者達の持つていた本の知

識から構成されているが、その知識の中でも野伏の状態はかなり悪い。

おまけにこの世界の医術では意識不明の人間を長期的に生かす術も存在しない。希望に縋るにしても、それはあまりも細く頼りなかった。

「くそお…………何でだよ……」

「もう、どうにもならんのか」

男戦士は膝をついて悔し涙を流しながら地面に腕を叩きつけ、鉱人の戦士は呆然としてしまう。

「とにかく、彼女を運びましょう。今後、どうなるにしても、この様な場所で寝かせて置きたくはありません」

僧侶の言葉で、彼らは細心の注意を払いながら野伏を運んだ。その表情は一様に暗かつた。

ロツクイーターの事件から数日後、気持ちを持ち直した薬使いはギルドを訪れていた。

ギルドは相変わらず賑わっていたが、その一角で男戦士が大量の酒に溺れていた。当然だが彼のパーティは活動していない。僧侶は彼女の故郷に現状を伝えに行き、鉱人の戦士は野伏についている。

あの日、野伏を連れ帰った彼らは彼女を神殿に預けることにした。神殿ならしっかりと体のケアをしてくれるので一先ず安心できるからだ。

今後、野伏をどうするかは彼女の故郷に報告に行つた僧侶が帰つてきてから決めるらしい。男戦士も何度も野伏の様子を見に行つていだが、目覚めない彼女を見ていられなくなつたのか、飲んだくれるよ

うになる。

薬使いは男戦士の横を無言で通り過ぎた。今の彼に何を言つても意味のないことはわかつてゐるからだ。

受付に行くと、いつもの様に新人受付嬢が応対してくれる。

「おはようございます薬使いさん。昨日のゴブリン討伐、お疲れ様でした！」

野伏の件は触れないところを見ると氣を使つてくれている様だ。

「本日はどうしますか？」

「何か依頼をこなそうと思います。おすすめはありますか？」

薬使いは少し意地悪な顔で聞いてみた。

「おつおすすめですか!?えーと!これなんてどうでしよう?」

「ではそれで」

「はつはい、つて依頼内容を見てないのに受けないでください!仕事を斡旋してあげませんよ」

「私、怒つてますと腰に手を当てて、アピールする新人受付嬢。「あはは、冗談ですよ…………うん。この依頼でお願いします」

「…………2度目はありませんよ」

「申し訳ありません。この様な冗談はもう致しません、受付嬢様」「ふふ、よろしい」

この程度の軽口を話せる程度には打ち解けた2人だった。

依頼の受理を待つてゐる間、薬使いはギルドの中を見回していようと、見覚えのある赤い髪の少女を見つける。

「あの子は確か……」

「どうかしたんですか?」

依頼の受理を終えた新人受付嬢が戻つてくる。

「いえ、見覚えのある少女が入つてきまして」

「お知り合いでですか?」

「知り合いの幼馴染ですね。一度だけ顔を合わせたことがあります  
が、恐らくあの子は俺の事を…………うん、きっと覚えてない  
ですね!」

あの時の事を思い返した結果、少女の目線は完全にスレイに向いて

いたので薬使いは少女が自分を覚えていないだらう結論づけた。

「そつそですか、それにしても彼女……ガチガチですね」

「確かに、もの凄くガチガチですね」

少女は緊張しているのか、動きの一つ一つがとにかく硬い。動きの悪い人形を見ているようだ。

「…………私、行ってきますね」

見かねた新人受付嬢が少女に近づいていく。薬使いは距離を開けてその後ろについていく。

「どうかなさいましたか」

「うひや！」

タイミング悪く、受付嬢は後ろを向いた時に声をかけてしまい、驚いた少女は飛び上がる。

その後も少女はガチガチに緊張して上手く喋れないでいた。

そんな少女の後ろに薬使いは回り込み、距離を開けて立つ（もはやお馴染みの）そして精安香を少し撒く。

「あつあの私これからも、叔父のてつ手伝いで来るんで、よつよろしくお願ひします！」

「はい、よろしくお願ひします」

精安香の効果が有つたかどうかは不明だが、少女はどもりながらも挨拶をすることができた。それに対しても受付嬢は笑顔でそれに応じた。

それを見届けた薬使いは、ギルドの扉を出で依頼の場所に向かつて歩き出した。だが、途中で薬使いを呼び止める声があつた。

「あの！」

「はい？」

最近できた妹といい、この声の主といい、後ろから話しかけられることが増えたなと思いつつ薬使いが振り返るとそこには先程の赤い髪の少女がいた。

「くつ薬使いさんですよね？」

「はい、そうですが」

少女に薬使いが名乗ったことはない。受付嬢にでも聞いたのかと

思っていると。

「わつ私牛飼い娘と言います。貴方の名前は彼からきつ聞きました。  
あつあのありがとうございました！」

彼とはスレイのことで、スレイは薬使いの特徴を少女に話していた様だ。そして何故かお礼を言われた薬使い。

「はつ初めての依頼で彼を助けてもらつて、それに少し前に無理しようとした彼を止めてくれて、本当にありがとうございました！」

薬使いはようやく納得する。牛飼い娘のお礼はスレイに手助けと助言をしたことについてだつた。

本人の中では、応急処置をしただけなのと、見てられないので止めただけという認識だつたのでお礼を言われると思っていなかつた。しかし、少女は純粋に感謝してくれてるので薬使いは素直に応じた。

「どういたしまして、少しでも助けになれたのなら良かつたです」「こつこれからも彼の事をよろしくお願ひします」

「分かりました。あいつは見えていて危なかつしいので、これからもどんどん口出しすることになります。なんせ、幼馴染様の許可がでましたから」

「はつはい、どんどんお願ひします！」

「それでは俺は依頼に行きます。何かありましたら遠慮なく声をかけてください、手伝えることなら手伝えますから」

そう言い残し、その場を後にした。

スレイと牛飼い娘の事を考えてながら歩いていた薬使いはある結論を出した。

「2人揃つて危なかつしい」

薬使いは、なんとなく自分と彼らは長い付き合いになりそうだと思つた。

## 第8話

薬使いは野伏の様子を見るために神殿を訪れていた。

彼女の眠る部屋に（ノックして）入ると、ベッドの横に義妹である少女がおり、野伏の看病をしてくれていた。

「おはよう」ぎります。兄さん」

「おはよう。元気そうでなによりだ」

「はい！」

少女と挨拶をした薬使い、

「ありがとな、野伏の身体のケアをやつてくれて、中々大変だろう」「へつちやらです。少しでも誰かの役に立てているのが嬉しいです！」

「偉い偉い、俺もそういう所は見習わないといけないな」

「えへへ」

思わず義妹である少女の頭を撫でる薬使い。撫でられた少女は嬉しそうに微笑んでいる。

少女が満足するまで頭を撫でた薬使いは、ベッドに近づき野伏の様子を見る

「やつぱり、目覚めそうにないか」

「はい。ここ数日、お身体ケアを他の方と交代でしていますが、お目覚めになる様子はないと聞いています」

野伏が昏睡状態になつてから1週間、彼女が目覚める気配はない。いかに長命で生命力が強いエルフの血が半分入つているとしても、いつまでこの状態で生き続けられるかは不明。目に見えないタイムリミットは確実に近づいてきているのは確かだった。

「野伏が目覚めるとしたら、それこそ奇跡……か」

「奇跡ですか？」

「ああ。神が人間に授けた奇跡の力ではなく、神自身が起こす奇跡の方な。起きて欲しいと思つたからつて起きるものじゃないけどね」

この世界には〈奇跡〉と呼ばれる力が存在する（魔法とも呼ばれ

る) この力は神や精霊が人間に授けたもので、信仰する神や精霊に願うことで通常ではありえない現象を引き起こすことができる。

しかし、問題点も当然存在する。まず、一日に使用できる「奇跡」の回数は決まっている点である。使用者が成長することで使用回数が増えることはあるが、その定義はよくわかつていなない。

次にどんな力を授かるかは神様が決めるので本人に選択権がない上に、力を授かれない人もいる点である。

それに加えて、同じ名前の力でも、授かった人により範囲や効果にも若干の違いがあることも確認されるなど、曖昧な面を持つ力でもある。授かったと言つても使うのが人間なので起こせる現象にも当然限界がある。

それとは別に神様自身が起こす「奇跡」も存在する。これは完全に神様次第の現象で、大きな奇跡から小さな奇跡まで何が起こるかは予測が不可能で、どんな形で起こるかもわからない。

決まったことをやつてているのか、神様の気まぐれなのか、それともダイスでも振つて決めているのか誰にもわからない。その代わりに起こせる現象に限界はなく、何が起きてても不思議ではない。

「まあ、神様自身が起こす予測不能の奇跡を待つより、授かった力で人が起こす奇跡の方がまだ、可能性はあるけどね」

「私は地母神様から奇跡を授かっていないのでよくわかりませんが、この神殿の神官様が使える奇跡では野伏さんを治療することできませんでした」

「そんなに都合よく彼女を治療できる奇跡を使える人がいたら、それこそ神様自身が起こす奇跡だな」

何度も述べているがそれだけ野伏の怪我は酷く、目覚めない原因も不明なのだ。

「正直、俺はおまえが野伏の身体のケアを担当すると聞いたときは嬉しい反面、止めるべきかとも思ったよ。頑張つて何日も世話をした人が苦労の甲斐なく、亡くなってしまうのは辛いからな」

義妹は、まだ10歳の少女である。助けようとした人が亡くなるという現実は少女の心に重くのしかかることだろう。

「兄さん。心配してくれてありがとうございます。それでも私は野伏さんの回復を地母神様にお祈りしながら最後までお世話を続けます。もし、ダメでもやりきつてから落ち込みます！」

「…………そうか……俺は義妹のことを甘く見ていたようだ！最後まで野伏のことをよろしく頼むよ」

穏やかな顔で薬使いは義妹をもう一度撫でる

「はい。全力で頑張ります。ですから…………もし、私が落ち込んだら、慰めてくれます……か？」

「つう！」

頬を少し赤く染め、上目遣いで聞いてくる義妹に、薬使いは新たな扉を開きそうになるが、ギリギリの所で踏み止まって自分を持ち直す。

「どんな結果になつたとしても、俺は全力で褒める。ご褒美として願い」と一つ叶える権利を約束しよう

ドン！と薬使いは胸を叩く薬使い

「はい。楽しみにします兄さん」

義妹の笑顔を眺めながら薬使いは生まれて初めて、地母神に本気で願つた。

「（地母神様、どうか義妹が泣かなくても良い未来に我らをお導きください）」

この世界の何処かでダイスが転がる音がした。

「それで故郷の村に行きたいと？」

「…………うん」

ここは辺境の町の食事処。薬使いは牛飼い娘と向かい合つて食事をしていた。

こうなつたのは40分前、ギルドの建物の前で出くわした牛飼い娘に相談を持ちかけられたところから始まる。

始めは緊張して言葉が出なかつた牛飼い娘も、薬使いが根気よく話すのを待つたことで徐々に落ち着いて話せる様になつていた(ついでに敬語も辞めることになつた)

話しの内容を要約すると、再会した大切な幼馴染であるスレイの事をもつと理解したい。

しかし、今の自分ではそれは難しい。そう考えた彼女は、今まで目を背けていた過去と向き合う覚悟を決めた。ゴブリンに滅ぼされた故郷の村に行き、心の整理をした上で今後、スレイとどう接していくのか考えていくことだつた。

「話はわかつた。それで俺が護衛に着けばいいのか?」

「そうしてもらうつもりだつたんだけど、あなたと話していたら、私はもつと色んな人と話せる様にならないといけない思つたの」

「なるほど」

薬使いは良い傾向だと思つた。時間はかかつたが薬使いとある程度話せる様になつたおかげで自信が付き、もつと色んな人と接してみたいと思う様になつてているようだ。

「それなら、俺の知り合いの冒険者を紹介しようと思うんだけど、どう?」

「うん。お願ひできるかな」

ここで選ぶ人選は重要である。前を向こうと頑張つている牛飼い娘に変な護衛をつけようものなら彼女の意氣込みを挫いてしまう可能性があるからだ。

そのため、ギルドに依頼して見知らぬ冒険者に護衛をしてもらうわけにはいかない。そこで薬使いは自分が知つていて信用できそうな人物に頼むことにした。

牛飼い娘を連れてギルドに来た薬使いは、早速目当ての人物に声を掛け、事情を説明した。

その人物は10代とは思えない色気を放つており、肩や胸元を大きく露出したローブを纏っている。

「それで…私に…依頼に…来たの？」

「ええ、可能ならあなたにお願いしたい、魔女」

彼女は魔女、スレイと同期の冒険者でその名の通り、白磁ながら複数の魔法を使いこなす人物である。

「事情…は、わかつた…わ。私で…良ければ…受ける…わ」

「助かる。ありがとう」

「あつありがとうございます！」

薬使いはお礼をいい、牛飼い娘も頭を下げる。

薬使いが魔女に頼んだのは、女性であることがあるが、一番の理由は彼女の人の柄にある。おつとりとした雰囲気を纏い、優しい性格である彼女なら牛飼い娘もあまり緊張せずに接することができるのではないかと考えたからだ。

更に彼女は気配りもしつかりできるので、牛飼い娘への負荷も最小限になるとも考えたからだつた。

薬使いと魔女の付き合いは、彼女がギルド登録した次の日からあり、薬使いが持つ香水に魔女が興味を持ったことから始まつた。今は得意となつていて（主にリラックス効果のある香水を好んでいる）

「いいの…よ。それ…と…いつもの…が…切れそう…なの…用意して…貰え…る？」

「了解。頼みごとを聞いてもらつていいんだ。今回は無料で提供しよう」

「ふふ…ありが…とう」

魔女が護衛の依頼を受けてくれたので一安心する薬使い。

「バランスを考えると、前衛が1人必要か」

護衛依頼の場合、依頼主の危険を排除する役と、依頼主の近くで危

険から守る役が必要となるので護衛は2人以上つけるのが通例である。

「なら、俺が受けてやるよ」

誰に頼むか考えている薬使いに話しかける人物がいた。青い鎧を纏い、長い槍を持った男性だった。彼は槍使い。

魔女同様。スレイと同期の冒險者で早い内から頭角を現している冒險者である。少々目立ちたがりや面はあるが、気さくな性格で好感の持てる人物である。

「悪りいけど話は聞かせて貰つたぜ。俺なら手も空いてるし、腕は充分だぜ」

「いいのか？あんたの望む、派手な戦闘は恐らくないぞ」

槍使いが好むのは英雄的な戦闘である。今回の護衛任務では戦闘は起こらない可能性が高いので彼の好むものではなかつた。

「話は聞かせてもらつたつて言つたろ。前を向こうとしている女の子に協力するのは男の務めだろ？」

ニヤリと笑う槍使い。その笑みには嫌味な感情は含まれておらず純粹にそう思つてゐるようだつた。

「そうだな……なら頼む」

「おう、任せな」

魔女と牛飼い娘が頷いたのを確認した薬使いは、彼に頼むことした。ギルドには魔女と槍使いを指定する形で依頼を出す。

新人受付嬢は牛飼い娘のことを知つていたので、事情を聞かずにつぐに依頼を通してくる。そして詳細を煮詰めた結果、村に行くのは明日と決まつたのだつた。

話をしていく少し遅くなつたので薬使いは牛飼い娘を牧場近くまで送つて行き。その日は帰宅したのだつた。

## 第9話

薬使いは言葉には出さなかつたが、内心で思つた。

「（今 度 は お 前 か）」

牛飼い娘の故郷訪問日の当日、彼女達（牛飼い娘、魔女、槍使い）を見送つた薬使いはギルドでのんびりと座つてドリンクを飲んでいた。そんな彼の前に、彼にとつての問題児となりつつある男。スレイがやつてきたのだ。

「頼みがある」

「ぬ？ 今度はどうした？」

なんの脈略も無く話しかけてきたスレイに、薬使いは氣にすることなくで対応する。

スレイが薬使いに話し掛けてきた回数はそれほど多くはないが、その少ない回数でも解ることがある。スレイの話は基本的に唐突であるということだ。

「ゴブリンから村を守りながら戦うときに、知つておいたほうが良いことがあつたら教えてほしい」

「ゴホッ！ コボッゴホッ！ 入つては……いけない方に、ゴホッ飲み物が

タイミング悪く、飲み物を飲んでいた薬使いは気管に入つて水分に苦しめられることになつた。

「ケホッ……苦しかつた」

「大丈夫か？」

「問題ないつてそんな事はどうでもいい！まさかお前、今度の依頼は村の防衛なのか！」

「ああ」

「依頼書見せてくれ！…………つつつつつつう！」

依頼内容を確認した薬使いは、言葉にならない声を上げて頭痛のしそうな頭を押さえた。

「村の防衛依頼を一人で？ マジか、マジなのか!? 冗談ではなく死ぬぞ、本当に！」

「おいおい薬使い。たかがゴブリンだろ？なんとでもな『実際にやばい数のゴブリンと1人で戦つたことない奴が知った風にほざいてんじゃねえ！死なないで程度に猛毒吸わせんぞ、こら！』はつはい、すみません」

横から口出ししてきた冒険者を、薬使いは普段のキャラも忘れた圧力で脅して黙らせた（後日、菓子折りもって謝罪にいきました）彼がこうなるのも無理はなかつた。今回の依頼はそれほど危険度が高いと予想されるのだ。

「そんなに危険なのか？」

「危険だ。青玉クラスのパーティだつたとしも全滅しかねないくらいに」

ゴブリン戦は、大きく分けると

〈偵察部隊などの数の少ない集団との戦いである遭遇戦〉〈ゴブリンの巣や溜まり場を攻撃する襲撃戦〉〈襲いかかるゴブリンから集落とそこにいる人達を守る防衛戦〉の3つに分けられる

その3つの中で薬使いが一番危険だと思つてゐるのが防衛戦である。その理由は村を壊滅させられる規模のゴブリンの群れを、短い準備期間で向かい打たなければならぬからだ。

（襲撃戦も相手のテリトリリーで戦かわなければならぬなど危険度が高いがこちらが攻撃する側なので準備の時間や襲撃のタイミングをこちらで決めることができる）

それに加えて、戦闘場所は平野で囲まれやすく、守る対象が多いので自分と仲間のことだけを考えているわけにもいかない。ゴブリンの数が多いので遭遇戦より遥かに危険で、慎重に行動したからといって襲撃戦ほど、危険度を下げることも難しいという厄介な戦闘なのである。

「ヤバイ…ヤバイぞ。このまま行かせると高確率でこいつは死ぬ。どうすれば……依頼に行かせない様にするか？催眠香を吸わせて監禁すれば可能だ。しかし、そうすると依頼者の村を見捨てるに至るし、コイツも俺を一生許さないだろう。何か別の手は…」

ぶつぶつ言いながらどうにかしようと考へる薬使い。周囲はスレ

イを除いてその雰囲気にすこし引いていた。

牛飼い娘のことを考えると、このまま行かせるなど論外。彼女とスレイはこれからだ。やつと彼女は前を向いて歩きだそうとしている。彼女の明るい未来にスレイがいるのは必須条件なのだ。

スレイ自身も初めてあつたときより若干だか余裕が出てきた気がする。そうでなければ薬使いに質問をしてくることもなかつただろう。ここで死なすわけにはいかない。薬使いは頭をフル回転させて解決策を探した。

「やはり俺が着いて行くかしか「ダメですよ。薬使いさん」わかっています受付嬢さん、わかつていますけど」

薬使いが行けない理由、それは彼がもう別の依頼を受けているからである。それもギルドから出された指名の依頼を。依頼内容は遂に出された＜ロツクイーター討伐作戦＞への参加要請だつた。

当初ロツクイーター討伐作戦が出されたとき、薬使いは迷つた末に参加しないつもりでいた。その理由はロツクイーターと薬使いの相性の悪さと、討伐作戦の参加人数の多さにある。

ロツクイーターは奇襲攻撃を得意とする魔物で、壁や地面を掘り進み獲物を襲撃する。その強力なパワーに反して移動音や振動は小さく、音に注意していないと奇襲に反応できずにその場で生涯を終えることになる。

薬使いに取つて問題なのはロツクイーターが地面の中を移動し、何処からくるのかを見極めるのが困難な魔物である点だ。

何処から来るかもわからない相手に毒煙玉を使つて視界を制限するのは危険極まりない行為であり、周囲には仲間の冒険者達がいるのでピンポイントで狙えない小瓶入りの薬品も使えない。下手な薬を使つて周りの仲間に薬の影響を及ぼしては目も当てられない。

薬使いの動きはかなり制限されまともな戦闘などできようもないのだ。以上の理由から薬使いは参加をしないつもりだつたのだ。そこにギルドから待つたがかかる。

「あなたが参加するかしないかで怪我人の生存率が大きく変わるのですから、お気持ちはわかりますが今回は此方を優先していただきま

す

ギルドが薬使いに求めた役割、それは後方での怪我人の応急処置と奇跡を使用の有無の判断である。

ロツクイーター討伐作戦では多くの死者と怪我人が予想される。当然、この作戦には多くの回復系の奇跡を使える冒険者が参加する。しかし、彼らの本職は神官や魔法使いであつて医療に深く精通しているわけではない。怪我を見ただけでは奇跡を使う必要があるかないかの細かい判断できないのだ。

多くの怪我人ができる可能性が高い依頼では回復系の奇跡は生命線とも言えるもの、応急処置をすれば死なずに済む人にまで奇跡を使い、本当に使わなければならぬ人の時に奇跡の使用可能回数が尽きているということはあつてはならない事態なのだ。

そこでギルドは指名してでも薬使いに参加を要請したのだつた。討伐作戦の決行は明日、薬の用意を終えているとはいえ、スレイの防衛する村は遠く、討伐作戦まで帰つてくるのは不可能。

助かるかもしれない多くの冒険者の命と、放つて置けない問題児であるスレイの命（牛飼い娘の未来も含む）彼は選択を迫られていた。そして考えた末に薬使いは決断した。

「受付嬢さん。討伐作戦には予定通り参加します。ですが、その前にやつて起きたいことがあるのでちょっと行つてきます」

「はい、時間までに戻つてきていただければ大丈夫です」

薬使いは受付嬢に討伐作戦までには戻ることを宣言し、スレイの方に顔を向けた。

「出発まで時間あるか？無ければ途中まで馬で送つて行くから今は従つてくれ」

「時間はある」

「なら、付いてくれ俺の家に」  
薬使いはスレイを連れて自宅へ向かった。

辺境の町の外れにある家。そこに薬使いは住んでいる。

「ここがお前の家か、広いし悪くないな」

「ありがとう。中央エリアから外れているけど、その分家賃も安くて  
気に入っているんだ。それよりこっちに来てくれ」

薬使いはスレイを一番奥の部屋に連れていった。その部屋は大量  
の中身入りの小瓶が置かれており、調合に使っていると思われる机に  
はすり鉢や計量器が乗っている。

「ここは調合室か？」

「ああ、俺の薬は殆どがここで作られている。そこの椅子に座つてい  
てくれ、お前に渡したいものを持つて来る」

「わかった」

スレイが椅子に座つて待つこと数分。薬使いは5つの小瓶を持っ  
てくる。小瓶の中にはそれぞれ別の薬品が入っているようだ。

「これは？」

「俺が作つたゴブリン専用の毒だ」

「つ！」

スレイが驚愕しているのが兜越しでも見て取れた。ゴブリン専用  
の毒。それはその名の通り、対ゴブリンの為に作られた物で他の生物  
には大きな害のない毒。ゴブリンを駆逐するのが目的のスレイから  
すれば喉から手が出る程欲しいものなのである。

「と言つてもまだ試作段階で、一定の効果は見られるがまだまだ改良  
の必要がある毒だ」

ゴブリンと遭遇率の高い薬使いは人間に害がなく、ゴブリンだけを  
殺せる薬品をずっと研究してきた。その中で生まれたのがこれらの  
試作品達である。

「これらの毒なら素人であるお前でも使えるはずだ」

「一緒に行くこともできない。しかし、このまま行かせればスレイは  
高確率死ぬ。そこで薬使いはスレイの装備を強化して少しでも生存  
率を上げることにしたのだ。

毒を使つて戦う上で、必ず身につけなければならない技術は自分の  
毒を害されることなく戦えること。いくら解毒薬が有つても自分の

放つた毒を吸つてそのたびに状態異常になつていたのでは、まともに戦うことなど不可能。

それ故に薬使いは何年もかけて毒の耐性や特殊な呼吸法を身につける必要があつた。

だが、この毒なら人間に害はないので素人でも扱いやすいのだ。今からそれぞれの効果と簡単な使い方を教える。紙にも書くから、道すがら覚えてくれ。他に要望があれば聞くから遠慮なく言つてくれ

「わかつた。感謝する」

「お礼はいいから生きつて帰つてこい。石に齧りついても、何に縋りついてでもだ」

「約束する」

「ならない、とにかくやれることは全部やつてから送り出すつもりだから覺悟しろ」

「問題ない」

一時間ほどかけて準備させたスレイを送り出した薬使いは、今更ギルドの戻つてのんびり気が起きたため、明日使う医療系の薬品の再チェックを始めたのだつた。

## 第10話

ロツクイーターの住む洞窟の入り口、そこは洞窟で戦っている冒険者達とは別の形で命のかかつた戦場だった。

「その人はあちらに運んでください！」

「今、止血をします。動かないで！」

「治療の奇跡を使います」

ロツクイーター討伐戦の開始から2時間、洞窟前の仮設救護所には負傷者が次々に運び込まれていた。治療が出来る冒険者達はこの、命の最前線に全力で挑んでいる。そんな中で薬使いは、「出血は酷いですか、止血すれば致命傷ではありません。軟膏で対応を！」

「はい！」

「傷が臓器まで及んでいます。奇跡による治療を」

「了解です！」

「かなりますいですね。催眠香で眠らせから奇跡を」

「わかりました、誰か手伝いを！」

「この方は……看取つてやつて下さい」

冷静に対応してしていた。治療法を決める自分が慌てている姿を見せるわけにはいかないからだ。

医療に携わる人間でも一生の中にここまで酷い状況を体験する人は希少だろう、運ばれてくる負傷者は全員重症で治療しなければ確実に死ぬ。しかし、負傷者は次々に運ばれてくるので一人に多くの時間はかけられない。死なないラインまで持つて行くことが限界。

治療が終わつても痛みを訴える人を放置して次の負傷者の所に向かわなければならぬ。これがいつまで続くのかも分からない。

そんなこの場の空気がこの場いる冒険者達の精神を否が応でも確実に削りとつていく。薬使いは予めこの場いる全員に精安香を配り、予備もあるだけ持つてきているがあまりの使用頻度にストックが削られ底が見て始めている。

このままでは精安香のストック切れ＝この場にいる全員の精神の

限界になりかねなかつた。そんな不安と戦いながら治療をしていた彼らに待ちに待つた瞬間が訪れた。

「やつたぞ！・ロックイーターの討伐に成功したぞ！」

洞窟から出てきた冒険者が討伐成功を告げる。この場のいる全ての人が歓喜の声を上げる。まだ全ての負傷者を治療できたわけではないが、彼らの目には遂にこの戦場の終わりが見えた。

討伐を成功させ、その場いる全員に最低限の治療を施した冒険者達は神殿に負傷者を運び込んだ。

予めギルドが場所を貸してくれるように頼んでいたのだ。治療は神殿に引き継がれ、多くの冒険者達がその場に座り込んだ。薬使いも立つてこそいるがかなり疲れている。

そんな彼に走り寄つてくる影があつた。

「兄さん！」

「おつと。出迎えありがとう」

「お怪我はありませんか？」

「大丈夫。俺は後方支援だからな。滅多なことじや怪我しないさ」

「それで心配はします」

抱きついてきた義妹に精神を癒してもらいながら、休憩すべきか、応急処置を手伝うべきかなど、この後に行動を考えていた薬使いだったが、そんな考えてを読んだのか義妹の少女は強い意志のこもつた瞳で薬使いを見る。

「兄さん、無理をしないで休んでいて下さいね」

「いや、でも「ダメです。後は私達に任せて下さい。どうしても無理するなら、少しだけきつ嫌いになっちゃいますよ」

「!？」

そのとき彼の体にかつてない特大の衝撃が走つた。薬使いを見ている者がいたならば、彼の背後に極大の雷が落ちる姿を幻視したことだろう。

「ハイ。ワカリマシタ。デスノデ、ドウカキラワナイクダサイ」

最愛の義妹、癒しの天使とも言える少女に嫌われる。それは薬使いに取つて精神の崩壊に繋がる（言い過ぎ？）ほどの衝撃だった。

「約束ですよ」

「ハイ。ヤクソクシマス」

薬使いは徐々に義妹に逆らえなくなつてきていた。

「おう、薬使い。微笑ましいやりとりしてるとこ悪いんだが、こいつを見てやつてくれ」

「いやいや俺は今から休……また、随分と傷だらけで帰つてきたなお前は」

討伐戦にも参加していた槍使いが連れてきたのは傷だらけになつてゐるスレイだつた。この男、村を襲うゴブリンを殲滅した後、休みもせずに帰つてきたらしい。

「約束通り生きて帰つてきた」

「ああ……うん、そうだな、ボロボロだけど……」

「致命傷を避ける努力はした」

「その点はよくやつた」

スレイは多くの傷を負つて動けなくなつてこそいるが意識しつかりして いるので命に別状はない様子。

「義妹様、これは俺の知り合いなのです。休む前にこいつの治療だけはさせて頂きたい。どうか許可を」

休むと約束した以上、処置するためには義妹の少女からの許可が必要。一応、周囲を見てみると手の空いてる人はいない、スレイの治療は薬使いがするのが最適だつた。

「ふふ、わかつてます。でもこの方の治療が終わつたら絶対に休んで下さいね」

「必ず」

「よろしい。私も手伝いますね。兄さん」

「お願ひします」

許可を取つた薬使いは義妹と協力してスレイの応急処置を開始する。

「うわ、良くなこの怪我で帰つてこれたな。襲われた村で休んでもよかつただろ」

「帰りを待つている人がいる」

「理由はわかるけど、あんまり無茶するなよな」

「善処する」

この手のスレイの言動は相変わらず信用できないので具体的な治療日数を付けた強制休養日を宣告するべきかと、思案しながら治療をしていた薬使いだったが、ここで治療に使う薬が少し足りないことに気づく。

「兄さん？」

「ああ。深い傷は治療できただんだが、残りの手當てに必要な薬が少しきりない。ちょっと探しくるから見ていてくれ」

薬使いが大量に持ち込んだ治療薬も怪我人のあまり多さに底を尽きていた。薬が無ければ治療もできないので周囲に分けてもらうため彼が動いた瞬間、目に小さな光が入った。

「今のは、治療の奇跡……ヒールか」

小回復（ヒール）はその名前の通り、回復系の奇跡の一つでメジャーな奇跡もある。この神殿にもヒールを使える者が多くいるのでヒールの光をみるとこと事態は可笑しいことではない、問題はその光の発生源が薬使いのものすごく近くにいることだった。

「えっと、マジ？」

「はい。私、みたい……です」

ヒールの光の発生源はスレイで、それを使つたのはスレイを治療を手伝つてくれていた…………義妹だった。

「このタイミングで奇跡を授かったのか」

「地母神様にくこの人を傷を少しでも治してあげたい」とお祈りしましたら突然光が。兄さんの役に立ちたかったですし

どうやら地母神様は少女に奇跡を授けることにしたらしい。

「うん。取り敢えず、良くなってくれた」

「えへへ。ありがとうございます兄さん。落ち着いたら地母神様に感謝のお祈りを捧げてないといけませんね」

「そうだな、その時は一緒に祈ろう」

義妹のヒールのお陰で残っていたスレイの傷は塞がつた。突然の義妹の奇跡覚醒に衝撃を受けた薬使いだつたが悪いことではないのですが、すぐ気を取り直して義妹を褒め讃える。

「さて、我が自慢の義妹のお陰で傷は塞がつたが、念のため包帯は巻くから動くなよ」

「ああ、頼む。それで俺は今日、帰れるのか？」

「医術を知るものとしてはもう数日はここで休んもらいたいな」「何とかならないか？」

珍しく食い下がるスレイ。

「ならんこともないけど「俺の帰りをずっと待っている大切な人がいる」……しようがないすこし待て」

普段の言動から素っ気ない様に見えて、スレイは牛飼い娘を大切に思っている様だ。

「こつちはこれでよし、後は「兄さん、こちらも包帯を巻き終えました」おつありがとう」

「処置が終わつたら少し様子を見てから送り届けるけど、数日は絶対に家で大人しくする様に。破つたら催眠香で起きる度に眠らせてやるのでそのつもりで」

「ああ」

「ふふ、兄さんはこの方の主治医さん見たいですね」

「本気でなるべきなんだろうか考えているよ。そうすれば大手を振つてドクターストップが掛けられるからな」

この言葉は後の現実のものになり、薬使いの心労に繋がるとは本人は思つても見なかつた。

—————

数時間後、休んで体力を回復させた薬使いは荷物（スレイ）を受け取り主（牛飼い娘）に届けに行くため歩いていた。そして目的地である牧場が見えてくる。

「ようやく着いたか、荷物があるから前に来た時より遠く感じるな」「すまない」

「荷物つて兄さん」

人を荷物扱いしている薬使いにスレイは謝罪し、着いてきた義妹は苦笑いする。

「俺は部屋はあちらの小屋だ。そつちに運んでくれ」

「その前に受け取り主に了承をもらつてからだ。運び込みはその後だ」

「…………」

「荷物扱いは継続するんですね」

家の前まできた薬使いは、義妹に扉をノックしてもらい声をかける。

「すいません。薬使いと言うものなのですが、どなたかいらっしゃいますか？お荷物、お届けにまいりました」

すると中から声が聞こえてきて牛飼い娘が慌てて飛び出してくる。名前を名乗れば人見知りな彼女でも出てきてくれると予想したが、思惑は成功する。

「薬使いさん。どうしたんですか？彼なら…………まだ帰つてきてません」

スレイが心配なのか後半は声が小さくなつた牛飼い娘  
「扉越しに行つた様に荷物（スレイ）を届けに来た」

「荷物つて……え？ 荷物つて彼のこと？」

「そうこれが荷物（スレイ）だ。義妹と一緒に届けにきたぞ。この書類にサインしてくれ。サイン貰い次第、運び込むから」

「え？え？」

「兄さん、牛飼い娘さんが混乱しちやつてますよ」

簡単な書類まで作つてきた薬使いに混乱しながら牛飼い娘はサインする。

「何處に運び込めばいい？この荷物（スレイ）？」

「えつと、あつちの小屋に運んでください」

「了解。運び込みます」

「…………」

薬使いがスレイの荷物扱いを辞めることはないと分かつたのか、牛飼い娘はこれ以上その件に触れるのを止めてスレイの部屋に案内する。

スレイの部屋に着いた薬使いスレイの鎧を外して気がさせてベットに入れる。

「俺は床で「荷物は黙つてるように」……」

「それで牛飼い娘、これが荷物（スレイ）の取り扱い説明書な。説明書に従つて正しく取り扱つてくれ」

「うつうん。ありがとう」

薬使いは荷物（スレイ）の破損（傷）の状態と保存（対処）法、問題（無理して動く）か発生した対応法（催眠香付き）を書いた紙を渡す。牛飼い娘は苦笑しながらも取り扱い説明書を受け取る。「さて、届ける物は届けたから、俺は帰るけど荷物（スレイ）は人に戻る（動けるようなる）まで大人しくしてて様に」

「ああ」

「兄さん、そろそろ人として扱つてあげましょ？」

「お前の頼みでも今回は断る」

「頑なに荷物扱いを辞めない薬使いだつた。」

「ありがとう薬使いさん。義妹さんもありがとうね」

「どういたしまして、さてと、帰るぞ」

「あつ兄さん。もう」

見送るという牛飼い娘にスレイについている様に言つて薬使い達は帰路に着いた。

余談だが、帰る際に牛飼い娘の叔父に、スレイを届けたお礼にと牧場で作つたチーズをもらつた（おいしくいただきました）

—————

ロツクイーター討伐から数日が経過し、ギルドでは討伐成功の打ち上げが行われていた。

「それではロツクイーター討伐の成功を祝つて乾杯！」

「—————乾杯！」—————

本来は討伐成功したその日に開かれるはずだつたのだが、負傷者が

予想以上に多かつたため、彼らが落ち着くのを待つて開かれたのだ。

「おら、飲め飲め薬使い」

「ええい。無理に飲ますな酔っ払いが。くそ、催眠香が切れてなければ」

「ほどほどに…ね」

酒に酔つた槍使いに絡まれいる薬使いに、それを微笑んで見ている魔女。

「何故、討伐に参加していない俺まで参加させられている」

「がはは、細かいことは気にするでないわ」

「こうなれば誰も止められません。諦めましょう」

その横で偶然ギルドに来ていたスレイも何故か巻き込まれていたりする。今は鉱人の戦士に付き合わされて酒を飲んでいる。僧侶もその横で座つて食事をしていた。

「おう、飲んでるかお前ら？」

「楽しく飲んどるわい」

「楽しく食べてますよ」

「…………」

スレイ達の元にやつってきたのは男戦士だった。彼も討伐作戦に参

加しており、勝利に貢献したらしい。そして、

「貴方は飲みすぎてはいけませんよ」→僧侶

「そうじや、家で奥さんも待つてることだしのう」→鉱人の戦士

「結婚したのが、おめでとう」→スレイ

「ヒューヒュー、お暑いねえ」→槍使い

「可愛らしい…奥さんで…よかつた…わね」→魔女

「結婚式やるなら言えよ。盛大に祝つてやるから」→薬使い

「うつうるせえ！まだ、慣れてないんだからそのネタでからかうな！」

↑男戦士

話からわかる様に眠つたままだつた野伏は目覚めたのだ。きつかけは薬使いの義妹の少女だつた。彼女がダメもとでヒールを掛けたみたところ、何と野伏が目覚めたのだ。

詳細は不明だが彼女の使うヒールは野伏の意識不明の原因に効果

のあるものだつたらしい。少女のヒールがどんな患者に効果があるかは絶賛研究中。

野伏が目覚めたことはすぐ仲間に伝わり、男戦士が最初にその場に駆けつけて彼女を抱きしめた。そして勢いで守れなかつた責任を取ると言つたらしく（無自覚に告白した後悔はないとのことだ）野伏も勢いに飲まれて了承した（こちらも後悔はないらしい）

それを後からきた他のメンバーにも聞かれ、そのまま背中を押しまれて即ゴールインすることとなつたのだ。

「そつそうだ。お前も大変だつたらしいな。ゴブリン討伐」「話を逸らしましたね」

「見苦しいぞリーダー」

パーティの仲間の言葉を黙殺し、男戦士はスレイに目を向いた。

「ああ、勝ちはしたが平野で奴らを戦うのは二度とごめんだ」

「だが、ゴブリン討伐は続けるだろ？」

「当然だ。奴らは根絶やしなければならない」

「そうか……ならお前は今日から〈ゴブリンスレイヤー〉だ」

「ゴブリンスレイヤー……そうだな、そう名乗ることする」

原作主人公たるゴブリンスレイヤーがこの場に正式に誕生する。彼はその名の通り、数多のゴブリンを殲滅するゴブリン殺しのプロへと成長することなる。

「ゴブリンスレイヤーか……長いからスレイって呼ぶわ」「台無しだ！」

薬使いの略称にツッコミ入った。

ダイスで遊んでる者達がいた。彼らは無数のダイスを持っており、次から次へとダイスを振つた。

ある時、投げたダイスの1つがもう止まつて目が出でいる2つのダイスに接触する。1つは勢いよく弾き飛され目を全く違うものに変え、もう一つには端に掠る様に接触し、目を少しだけ別のものに変え

た。

それを見た遊んでいる者達は思つた面白いと、変わつてしまつた目を直さず。成り行きに任せてみるとことにした。ぶつかつたダイスはまだ、転がつてゐる。

## 第11話

薬使い、その名の通り薬を操つて攻撃と回復（応急処置レベル）をこなせる男。

先のロツクイーター戦では彼の医療知識と、持ち込んだ薬が多くの冒険者達を救つた。

彼はその功績からギルドより昇級審査の参加資格を得ている。同期の中では間違いなく出世頭である。そんな薬使いは今

「…………」

生氣の薄い瞳で薬品を調合している。彼の背後には完成した薬が山の様に積まれていた。

事の始まりは3日前、ロツクイーター討伐の打ち上げから数日が経過しており、薬使いは久しぶりにギルドに訪れていた。

彼はこの数日間をロツクイーター戦で使い果たした薬品の素材集めと調合に費やしていたのだ。素材集めにあちこちを飛び回り、家に籠つてひたすらに調合する日々。中々過酷な日々だったそうだ（本人談）

そしてある程度のストックが溜まつたので久しぶりにギルドに顔を出すことにしたのだ。そしてギルドを訪れた事で彼の受難が始まった。

受付嬢に挨拶をした薬使いは本日行われる昇級審査までの待ち時間を使つて待つことにした。そんな中、

「お！ 薬使い、やつと来たか」

「男戦士が、嫁さんとの新婚生活はどうだ？ 幸せか？」

「最高だ。日常生活は厳しいけど、ふとしたときに甘えてくるところとか、可愛くて堪らなつて言わせんじやねえ！」

聞かれ思わず。惚れ気を話してしまった男戦士を生暖かい目で見る薬使い。

「よしよし、幸せそうで何よりだ……将来このネタだから覚えるな（ボソ）……それで用件はなんだ？」

「今、小声で恐ろしいこと言わなかつたか!？」

「言つてない言つてない。さあ、用件をどうぞ」

「くそ、後で問い合わせやる」

追求は後にして男戦士は用件に入る。内容を簡単に纏めると、薬使いの作った薬品を売つて欲しいとのことだつた。野伏という大切な人ができた男戦士は前以上に死ぬわけにはいかなくなつた。

例え、どんな英雄的で誰からも尊敬される死に方をしても、最も悲しませてはいけない最愛の人を悲しませてしまう。そんなことはあつてはならない。

自分はどんな無様をさらしても、ボロボロになつても彼女の元へ帰らなければならぬ。そこで彼は戦闘スタイル、装備、持ち物などを一から見直すこととしたのだ。

そして最優先で手に入れなければならぬと思ったのが、治療用の薬品と逃亡用のかく乱アイテムだつた。

治療薬品は言うまでもなく、怪我や毒を受けた時にそれが原因で死なないためのもの。逃亡用の道具ともしもの時に逃げるために必要。これが有るか無いかでは生存率は大きく変わつてくる。

ではそれをどうやつて手に入れるか、彼は薬使いから買うことを思ついた。薬使いの薬品の効果はロツククイーター討伐戦で証明されている。更に男戦士は薬使いが煙玉を使うことも知つていた。なら市販の薬店で売つている物を買うより、薬使いから買った方が良いものを買えると考えたのだ。

「というわけなんだ。頼む、お前の薬と牽制用の煙玉を売つてくれ！」

「良いぞ「本当か!?」ああ、別に独占する気はない、欲しければヤバイ奴以外なら誰にも売るよ。但し、売れるものと売れないとあるからそこはよろしく。使い方を誤つて死なれたりするのはごめんだしな」土下座しそうな勢いで頼んでくる男戦士の頼みを薬使いはあつさり了承する。別に彼は自作の薬を自分や身内で独占するつもりはない。今まで誰も頼んでこなかつただけで、頼まれば適正価格で売つても良いと考えていたのだ。

「…………こんなもんだな。ほら、これに売れる物と効果、価格を書いと

いたから、欲しいものがあつたら別の紙に書いて受付に渡してくれ。後で確認する」

「思つて、いたより安いな。これなら必要な分が買えそうだ」「どの薬が必要かは話し合つて決めるのを進める」

彼は紙に薬の効果と価格を書いて男戦士に渡す。

「わかつた！仲間と話し合つて決めてくる」

「そうしてくれ、おつとそろそろの昇級審査時間だな」

仲間の元に行く男戦士を見送つた薬使いは受付嬢の案内に従つてギルドの奥に入つていつた。

この時、彼はあるミスを犯した。昇級審査と男戦士との会話に思考の殆どを割いていた薬使いは気づかなかつた。

周囲の者達が男戦士との会話に聞き耳を立てていたことに、薬使いの欲しければ誰にでも売る発言に反応していたことに。気づいていればこの後に起ころる事態に対して心構えくらいはできたかもしれない。

――――――――――――――――――――――――――――――――――

60

「なんだ。これは……」

無事に昇級審査に合格し、白磁から黒曜に昇格した薬使いは受付から渡られた紙を見て絶句した。

彼に渡された紙は一枚ではない、それは分厚い紙の束だつた。どう見ても男戦士達が書いた分だけではない。紙をめくつていくとそこには冒険者の名前と欲しい薬が書いてあつた……数十人分の。

「ええつと、薬使いさんが昇級審査に行かれた後に、たくさんの中間者さん達が来られてこれを渡されまして」

薬使いは見誤つていたのだ。自分の薬が冒険者達にどう評価されているのかを、どれだけの冒険者たちが彼の作った薬を欲しているかを。

評価が飛躍的に上昇したのはロツクイーター戦。彼の持ち込んだ治療薬は多くの冒険者達を救うことになつた。血止め軟膏で多量の出血を免れてもや、催眠香で眠らされ痛みに悶えることなく治療された者。

彼らやその仲間達は薬使いの薬の有用性を実戦の中で目撃したのだ。手に入るなら欲しいと考えるのも当然の流れだつた。男戦士との会話で薬使いが自作の薬を普通に売つてくれることがわかつたので彼ら一気に押し寄せたのだつた。

「…………まずいな

彼は欲しいなら売るのは構わなかつた。それが複数でもそれは変わらない。問題なのは、

「ストック分じゃ、まつたく足りない!?」

予想を遥かに上回る希望者の数に量が全然足りなかつたのだ。

その日から薬使いは家に籠つて調合を始めた。材料の調達はギルドに依頼して自分はひたすら調合する。

「くつ薬使いさん。○○人分の材料をすり潰しました」

「そこに置いといて、休憩は適度に取つてな」

依頼された薬の量を見た薬使いは、一人で薬作りの全工程をするには時間が掛かり過ぎる上に負担が大きいと考え、人を雇うこととした（神殿に頼むことも考えたが金銭の絡むことなどで良い顔されないと考えて断念）

手伝いの募集を掛けようと考えていた薬使いの元にその人物は現れた。

「無理だけはしないように。無理させたと知られたら君の旦那が押し掛けてくる

「はいい、わかりましたあ」

雇われたハーフエルフの少女は机に突つ伏す。そう。休憩に入り机の上で空気の抜けた風船の様になつている人物はあの野伏である。

男戦士と結婚が決まり冒険者を引退した彼女は新たな仕事を探していた。そこに旦那である男戦士から薬使いがヤバイ状態になつていることを聞いた彼女は手伝いたいと言つてきてくれたのだ。

薬使いは二つ返事で彼女を雇い、難易度の低い工程をするのが彼女の仕事となつた（薬使いが雇い主となつたので敬語となつていて）

「野伏さん、兄さん。リラックス効果のある紅茶が入りましたよ」

「ありがとうございます。義妹さん」

「ありがとう。俺も一息いれるかあ」

それに加えて、自分の家で他人の新妻と二人きりなのは倫理的まざいのと思つた薬使いは義妹の少女にも助けを求めた。

義妹の少女は笑顔で手伝いに来てくれ、調合の手伝いに加え、時間がなくてまともにできない家の掃除や料理など、身の回りの世話を泊まり込みでしてくれている。

「お二人のサポートは任せてください。精一杯頑張りますから」

「ヤバイな義妹に頭が上がらなくなつてきたよ。困ることないんだけどさ」

「良い義妹さんじやないですか。天使ですか？私もあんな妹が欲しい」

「俺もこの子と兄弟の契りを交わせたことに、毎日地母神様に感謝しているよ」

「もう、お二人とも大げさですよ」

慈愛に満ちた少女の笑顔に天使を見た二人は思わず神に感謝の祈りを捧げる。少女は二人の高すぎる評価に頬を赤く染めるが怒つてしまはなかつた。二人はそんな少女の様子癒されて、この後の作業に挑むのだつた。

予想外の量の注文を受けてから2週間後、彼らは全ての薬品を作つて納品する。

この2週間で義妹の少女と野伏の薬品調合の腕は飛躍的に上昇し、薬の種類によつては薬使いの手を一度も借りる事なく調合できる様になつていた。2人ともかなり辛かつたらしく素直に喜べなかつたらしうが。

今回の件で薬使いは2人に破格の報酬を払つたが、それでもかなりのお金を手にしたのだつた。

そしてどんなコンディションでも身体が機械的な正確さで動いて、

薬を調合できる域に達することになつた（大変過ぎてミリ単位も喜べなかつた）

今回は良く確認しなかつた自分が原因だつたから受けたが、もうこんな無茶な注文は受けないと心に決めた薬使いだつた。

今後の薬の売り方は週に決まつた量の薬を作つてギルドに納品し壳つてもらう形に落ち着いた（追加注文は要相談で）

「「お金より時間が欲しい（です）」」

仕事を終えた3人が最初に口にした言葉だつた。

おまけ

「へえー薬使いさんはそんなことになつてるんだ？」

「ああ、かなりきつそうだつた」

「君は手伝つてあげないの？」

「義妹と知り合いを雇つているから問題ない」

「義妹さんか、なら大丈夫だね」

「問題があるとしたら」

「したら？」

「あいつに余裕ができるまで頼み事はできない」

「ふふ、そつか、それは大変だね」

「ああ」

話題は薬使いの苦労話だつたが、スレイとたわいない話ができて、すこし嬉しかつた牛飼い娘だつた。

## 第12話

今回、薬使いは義妹と共に水の街を訪れている。

彼がこの街に来たのはこの水の街で流通しているある薬について調査する依頼が入ったからである。

依頼者である水の街の神殿によれば、この水の街で飲むだけで身体を強化できる薬が開発され、流通しているらしいのだ。しかし、この薬には副作用がある可能性が浮上している。

使用者の一部に不調を訴える人達が出ているのだ。水の街の神殿としてはすぐに原因の調査を始めたかたつたのだが、薬を開発者が、水の街でも有数の権力者の一人と繋がりを持つ人物であるため、不調の原因がその薬であると断定できない内は大々的に立ち入り調査ができるならしく、細々としか調査ができていない。

それに加えて水の街で薬学に詳しい人物は街の人にも顔を知られており、調査していることが知られれば要らぬ混乱を招く可能性がある。そのため、神殿はギルドを通して薬学に精通している人物を探すこととしたのだ。所属するギルドで実績を残していることや、有名すぎないことなど、複数の条件を加味した結果、薬使いに白羽の矢が立つことのなつたのだ。

「兄さん、私も連れて行つてください！」

「いや、俺としては連れて行つてあげたいけど一応、依頼だからなあ……」

「私と一緒にいれば怪しまれず街を歩き回れますし、神殿にも違和感なく入れるはずです！」

「それは……確かにそうだな」

1週間ほど家を開けることを義妹に伝えに行くと、彼女は自分もついて行くと言い出したのだ。それも自分を連れて行くことで得られる利点をしつかり上げて。

事実、少し前に神官見習いとなつた義妹が一緒に来てくれば、神官を志している少女が水の街の神殿を見てみたくて、冒険者である兄にねだつて連れて来てもらついると装うことができるのだ。

「わかつた。一緒に行こう。ただし、色々手伝つてもらうからな」

「はい！」

薬使いは遠慮なく自分の意見を言えるようになつた義妹に関心しながら、一緒にくることを許可するのだつた。

――

「ここが水の街です……綺麗な所ですね」

「確かにすごいな、街も立派だけどこんな大量の水を見るのも初めてだ」

水の街は西方の辺境でも最大の街で、町中に水路が張り巡らされている水上都市である。この街には至高神を祀る大きな神殿があり、裁判所の役目も担つていて。

「これからどうしますか？」

「取り敢えず、薬屋、ギルド、神殿の順に見ていくこう

「はい！」

2人は行動を開始する。ギルドや店で薬の噂話を集め、薬の現物も手に入れた。そして現在は神殿を訪れて不調を訴えた人物と話をしている。

「では、その強化剤を使つたのは初めてではないんですね？」

「ああ、今まで20回は使つてるな、だが体調が悪くなつたのは今回が初めてだから、ほかの連中と違つてこの薬が原因なのかは俺には分からん」

「成る程、今のお身体の具合はどうですか？」

「正直つらいな。身体が重くて関節が少し痛い」

「わかりました。これを吸つて見て下さい、解毒作用のある香水です」

「ああ」

解毒香を患者に吸わせて20分ほど待つと患者の身体に変化が訪れる。

「おお、少しだか身体が軽くなつた。痛みも和らいだ気がするな」

「……効果はあるけど、すぐには治りませんか……もしかして

……」

「なあ、あんた。俺は治るのか？」

患者の男は恐る恐る聞いてくる。それに対しても薬使いは冷静に見解を告げる。

「確約はできませんが、その香水がゆっくりといえ効いていますから、治せると私は考えています」

「あつありがたい。痛みの所為で仕事がやりずらくつて困つてたんだ。頼む、俺を治してくれ」

「頼まれました。先程吸つてもらつた解毒薬を数日分出しますので一日3回、5分間吸い込んで下さい。それで徐々に良くなるはずです。それと他の症状が出たらすぐに神殿に来て下さい。酷くなつてからでは治せるものも治せんから、私も数日間はこの街に留まるので何かあれば対応できます」

「わかつた。ありがとう」

数時間後。調査に協力してくれた全ての患者達に話を聞き終えた薬使いは、街の薬屋で手に入れた薬の現物を調査し始める。解毒香を横に置いてもしもの事態に備えた薬使いは、始めに薬を匂い嗅いで匂いから使われている材料を予想する、次に僅かに口に含んで味を見ることで材料予想の精度をさらに上げていく。

「この匂いにこの味は…」

薬を吐き出して解毒香を吸つた薬使いは、先程の診察を合わせて副作用の原因をかなり絞り込むことに成功する。

「どうですか。兄さん」

「ああ、大体の予想はついた。でも報告するなら確信を持つてからにしたい。そのためにはこの薬で実験する必要がある」

「お手伝いします！」

そして2日後、薬使いは強化剤を効果をレポートにまとめて神殿に提出する

「これで一安心だな」

「お疲れ様です。これで明日からはお仕事抜きで街を見て回れますね」

「そうだな。流石に疲れたよ。体がガチガチだ」

「兄さん。今、マッサージしてあげますね」

「いつもありがとう」

神殿に資料を提出した薬使いは義妹にマッサージしてもらうとい  
う至福の時間を堪能するのだつた。しかし、このまま平穏で終わるほ  
ど薬使いの人生は甘くはなかつた

مکالمہ نامہ

「…………なあ、義姫よ」

二

「…………どうして、こんな二だの三だのにな」

清江先生集

卷之三

卷之三

仕事を終えて水の街を満喫しようとした彼らの元に神殿から使いの男性が訪れのだ。要件は神殿に赴いて昨日提出した書類の内容を直接、上の立場の人物に説明して欲しいとのことだった。

事で了承する。ここまで予想していた。ここまで。

薬使いが義妹と神殿に到着すると二人は応接室に招かれる。そしてそこには予想外の人物が待っていたのだ。彼はその人物を見て固まり、横にいた義妹も同じように固まっている。そこにいたのは金色の髪に抜群のプロポーションを持ち目元を布で覆つた美女だった。「わざわざ、ご足労頂いてありがとうございます。私がこの神殿の大司教です。皆からは剣の乙女と呼ばれております」

.....

剣の乙女。彼女は辺境における神官職の頂点に位置する人物で、水の街の神殿におけるもつとも高い位の人物でもある。また、5年前に魔神王の1柱を倒したパーテイのメンバーでもある金等級（上から2

番目) 冒険者である。

神官としても、冒険者としても、2人にとって正に雲の上の人物である。

「（まさかのトップが来てしまった!?（しまいました!？）」

2人は自分達の予想を遙かに上回る立場の人物に、心の準備が全く出来てない状態で応対することになり平常心が空の彼方に亜音速で飛んで行ってしまっているのだ。

「あの、どうかなされました？」

「いっいいえ、まさか剣の乙女様が直々に話を聞きに来られるとは思いもしなかつたので、驚愕しております。私は薬使いです。よつよろしくお願ひします！」

「いつ義妹の神官見習いです。剣の乙女様にお会いできてこつ光榮です！」

「うふふ、よろしくお願ひしますね。もつと楽にされて大丈夫ですよ」心配させてしまつたことに少し悪い気はするが2人はそれどころじやなかつた。このままでは普通会話するなど不可能。そこで薬使いは賭けに打つて出る。

「少々よろしいでしようか。剣の乙女様？」

「あら、如何されましたか？」

「私も義妹も緊張してしまつて、このままではしつかりとした説明が出来そうにありません。そこでほんの少し時間を頂きたいのですが、よろしいでしようか！」

この行動は相手によつては失礼と取られる行為になる。上の立場の人物がわざわざ時間を割いて話を聞きに来ているのに、落ち着くために時間に割いてくれと下の立場の人間が要求するのは、上の立場の人物のプライドを傷つける行為と取られる可能性があつたのだ。

「ええ、構いませんわ。少しとは言わずにゆつくりと心を落ち着かせてください。私もその方が話やすいですから」

「ありがとうございます！」

上品な笑みで許可してくれる剣の乙女。彼女の温厚な人柄は話に聞いていたが、危険な行為であることに変わりはなかつた。内心では

安堵する薬使い。

「妹よ。これを」

「ハイ、ニイサン」

薬使いは（こんな時に大活躍の）精安香を取り出し、義妹の少女と共に一気に吸い込む（薬は用法容量を守つて正しく使いましょう）

そして2人はなんとか落ち着きを取り戻すことに成功して大きく息を吐く。そして正面に向き直る。その顔からは先程の極度の緊張が消えており、しつかりとした会話できる状態になっていた。

「お待たせして申し訳ありません。それでは説明に入らせて頂きますが、よろしいでしょうか？」

「ええ、構いませんわ」

通常なら緊張でガチガチになつてきた人物が何かの薬を吸い込んで緊張を緩和させれば、危険な薬を使つているのではないかと思つて警戒するところだが、

そこは魔神王を倒したパーティの一人である剣の乙女。穏やかな姿勢を崩すことはなかつた。それどころか見せるものが見ていれば彼女の瞳には薬使いの行動に対する強い興味の色が浮かんだことを見て取れたことだろう。

「以上が私の見解です」

「なるほど……そういうことでしたか…それではこの薬は販売を中止した方が良いですね」

「はい、もつと詳しくこの薬を研究すれば副作用を無くすことができることも知れませんが、現時点でのこの薬を売り続けることはおすすめできません」

薬使いの説明したことを見ると。例の件の薬には毒素が含まれていた。毒と言つてもその毒性は弱く、余程大量に摂取しなければその場で身体が不調を訴えることはない。

しかし、この毒素は人の免疫システムでは完全には解毒されず、身体に蓄積していくのだ。そして徐々に悪影響を及ぼし始める。

不調を訴えた者達は共通して薬の使用回数が15回を超えていた。

一回の使用量や体质の個人差はあるが15回が毒素が牙を剥き始め  
るボーダラインと推測された。

開発者も人体実験はしていた様だが、まさか毒の影響が出るのがそ  
んなにも遅いとは考えもしなかったのだろう。

「現段階の不調でしたら、時間はかかりますがこの解毒香を使用して  
いけば改善できる筈です。材料を用意していただければすぐ調合し  
ます」

「わかりました。材料はすぐに用意します。薬の開発者と販売元にも  
すぐに使いの者を走らせます」

「よろしくお願ひします」

剣の乙女は人を呼び、その場で認めた（したためた）書簡を持たせ  
て走らせた。この一件はこうして解決に向かっていく。

「薬使いさん、神官見習いさん。貴方達のおかげで被害者を救済し、被  
害の拡大も防ぐことができました。水の街を代表するものとしてお  
礼を申し上げます」

「お力になれてよかつたです」

「わつ私もですか？特に何もできませんが」

「そんなことはありません。貴方がいたから薬使いさんが怪しまれる  
ことなく、街を見て回れたのですから」

「剣の乙女様の言う通りだ。それに他にも俺をサポートしてくれただ  
ろう。かなり仕事が捲ったよ」

「あううう」

大好きな兄と尊敬する剣の乙女に褒められて顔を真っ赤にして俯  
く神官見習い。

「これで依頼は終わりです。報酬もすぐに用意させますわ。それでは  
これからは別のお話をさせていただきたいのですがよろしいですか  
？」

「別のお話ですか？」

剣の乙女ほどの人物が2人を呼び出し、直接応対したのは依頼の成  
果を聞くためもあるが、それだけではなかった。

「先程までのお話が依頼者として私だとしたら、これから話すのは神

殿の代表としての私のお話になります」

「…………お聞きます」

「薬使いさん。私は貴方と今後とも良い付き合いをしていただきたいと思っています」

「付き合いでですか？」

「…………」

剣の乙女の言葉に意図が掴めない薬使い。神官見習いは兄達の話の邪魔にならない様に黙った。

「私の作った薬がご所望ということですか？」

「それもありますわ。私個人としても貴方のお作りになる薬を売つていただきたいですし、この水の街の人達にとつても有益なものとなるでしょう」

「でも、それだけではないと？」

「ええ、私がお願いしたいのは、貴方にいざという時の外部協力者になつて欲しいのです」

「協力者…………ですか？」

今回の一件で剣の乙女は、水の街の問題だとしても外部の者の力を借りなければならぬときがあることを再認識した。

だからと言つてその度に別の街のギルドの声をかけて、冒険者を探してもらつていては時間がかかる。そこで信頼できる人と直接契約を結ぶことで、依頼を出したときに誰かではなく、特定の人物を派遣してもらえる様にしたいのだ。そうすれば時間がないときでも無駄なロスタイムを減らすことができる。

「失礼ながら貴方のことは調べてさせてもらいました。その結果、貴方は信用に足る人物だと私は判断したのです。どうから私と契約を結んでいただけないでしょうか？」

「…………」

「どうかお願ひします」

頭を下げる剣の乙女に薬使いはどうすればいいかわからなかつた。薬使いは自分がそこまで凄い人間だとは思っていない。そんな自分が冒険者として雲の上の存在である剣の乙女の力になれるのか疑問

だつたからだ。そんな考えに縛られていた薬使いの手が暖かい温もりに包まれる。薬使いがそちらに顔を向けると。

「大丈夫ですよ兄さん。兄さんならきっとでき

アヌエで、お兄さん、お兄さんなんぢ」とて、三に

「もし、兄さん一人でだめなら、私が手伝います。それだけじゃありません。兄さんがお願ひすればゴブリンスレイヤーさんや魔女さん、みんなが手を貸してくれますよ」

薬使いは彼らを信頼していた。

……………そうだな  
僕の乙女様 その説をお受けします」

「あらがとくうじいわば、任せりと云ひてはなんですが、和の力はな  
れることがあつたら言つて下さい。必ず力になりますわ」

ここに薬使いと劍の乙女に協力関係が結ばれた。

水の街をでの滞在期間が終わり、辺境の街に帰ってきた薬使いは思つた。

なんだかとんでもない人との縁ができたな。俺の人生って実はけつこう波乱万丈なのかもしだれない。嬉しくないけど」

「でも兄さんなりアヌスで、この和菓子がもしれないでくれる」

一程々に頑張ります」

おまけ

「これが今週分の水の街からの薬の注文だな。剣の乙女様は精安香と催眠香をどぞ所望つと」

図らずとも薬師としての仕事を更に増やしてしまった薬使い。彼は水の街の神殿にも、こちらの神殿と同じ様にレシピを渡して、何かを作つてもらうべきかと本気で悩むのだった。

## 第13話

薬使い、彼の周りでは色々なイベントが起こつた。ロツクイーターとの遭遇戦から始まり、剣の乙女との契約まで、通常ならそうそう起りえない大型イベントが目白押しで、彼は大忙しであつた。

そんな望まないイベントが、盛りだくさんの時期も遂に終わりを迎え、彼の日常が返つてくる。しかし、彼の日常とは。

「不快だ」

「GYAOO」

「消えてろ」

「GAB！」

「鬱陶しい」

「GABA！」

ゴブリンとの戦いの日々だつた。

例えゴブリン討伐の依頼を受けていなくとも道中で遭遇する。それが彼の日常だつた。

「ふう、終わつたか」

この戦闘の発端は、彼が依頼の帰り道に立ち寄つた村で白磁の冒険者達がゴブリン討伐ために洞窟に向かつたと聞き様子を見にきたことから始まつた。

因みにそれを聞いた時の薬使いは「ちくしょおおおお、またかあああ！」と久しぶりに叫ぶこととなつた。彼のゴブリン討伐数を数えるカウントは完全に再起動したのだ。

「今日はギリギリ間に合つたな」

ゴブリンの駆除を終えた薬使いが後ろを向くと、そこには怪我をした新人冒険者達が横たわつていた。

男が二人に女が一人のパーティで。男達は刺し傷で大量出血しており、女は犯されてこそいなが衣服は破かれて全身を殴打されていた。

薬使いが到着した時点では男の冒険者二人が女の冒険者を庇う様に戦つっていた。

状況から見るに女の冒険者が後ろから頭を強打されて服を破かれ、それに気づいた男の冒険者達が周囲のゴブリンを追い払い、身を呈して彼女を守っていたといったところだろう。

薬使いが戦闘に参加し、ゴブリンの数を瞬く間に減らしていく様を見たことで彼らを支えていた気力が尽きたのか二人ともその場に崩れ落ちることとなつた。

「あ…………あの…………なか……ま……は」

「生きてはいる。怪我は酷いがなんとか助かりそうだ」

男冒険者一人を治療していると女冒険者が気力を振り絞つて仲間の容態を問い合わせてくる。

「よか……た……ありが……とう……ござい……ます」

「どういたしまして、あんまり喋らないほうがいい。あなたの傷も浅くはない。後は任せてくれ」

「は……い」

女冒険者は安心したように眠りにつく。一通りの治療を終えた薬使いは周囲を見渡した後、呟いた

「本当に胸糞悪い」

怪我人を神殿に届けた薬使いはギルドに戻つてきている。

「そうですか……いつもありがとうございます薬使いさん」

「いえ、今回は助けられてよかったです」

自分の依頼の達成と、重傷を負つた冒険者達の容態をギルドに報告した薬使い。新人受付嬢も鎮痛な面持ちでそれを受ける。

ゴブリンとの遭遇率が高い薬使いは、奴らに挑んで敗北した者の末路を知つていて。何度も見ても気分は最悪になるが、最初の頃より心の動搖が小さくなっていることも自覚していた。しかし、どんな動搖が小さくなつても見ていて気分の良いものではないので極力見たくはなかつた。

「(どうにかならないものか。このゴブリン軽視の傾向は)」「

ギルド内の椅子に座つて声に出さずに考えている薬使い。

重傷を負つた新人達もゴブリンを舐めてかかつたことが傷の原因

だと思われる。勢いのある新人冒険者は戦う魔物のことを詳しく調べたりしない。

特に半端に知っているゴブリンが相手なら尚更だ。実際、彼らの装備や持ち物には洞窟の中で使える短い武器や、毒を治療する解毒薬も入っていなかつた。

「（問題は俺が忠告した所で聞く奴が少ないとだよな）」

薬使いの等級は現在黒曜。言葉だけで周りを納得させるには最低でも紅玉（5番目）の等級が必要になる。ままならないものである。

「薬使い、頼みがある」

「前にも似たセリフを聞いたな。それで今回はどうした？」

色々考えながら座つていた薬使いの元にスレイがいつもの様にやつてくる。二人のやり取りも、複数回行われているので薬使いもスレイも慣れた様子で会話を進めていく。

「お前の知つているゴブリンの知識の全てを俺に教えてほしい」「…………」

あまりにもタイムリーな話題に思わず沈黙する薬使い。

「どうした？」

「いや、お前並とは言わないが、その三分の一でもいいから新人達がゴブリンについて知る努力をしてくれば死者も減るのになと思つてな」

「そうか」

「わかつた。教えるから何時もの様に家にきてくれ。簡易だけど俺の知るゴブリンについての情報をまとめた資料がある」

「感謝する」

本気で努力するスレイの力となるなら、薬使いは自らの知識と時間を惜しむことなどなかつた。

スレイを自宅に連れて来た薬使いが家に入ると。  
—————  
——

「ただいま」

「お帰りなさい、兄さん。ゴブリンスレイヤーさんもいらっしゃいませ」

神官見習いこと義妹の少女が出迎えてくれた。彼女は1週間の半分を薬使いの家で過ごし。それ以外の日は神殿で神官になるための勉強をしているのだ。

「邪魔をする」

「今、お茶を入れますね」

「ありがとう」

神官見習いはお茶を入れるために台所に入つていく。その間に薬使いは奥から紙の束を持つてくる。

「これが俺のまとめた資料だ。とりあえず一通り読んでみな

「ああ」

神官見習いの入れてくれたお茶を飲みながらスレイは資料を読んでいく。かなり集中しているらしく、ページをめくるとき以外は殆ど動かなかつた。

必要だと思う所は何度も読み返しているので、資料を読みだしてから1時間が経つがまだ読み終わつていない。

ゴブリンを駆逐するにはどんな努力も厭わない。そんなスレイを見た薬使いは、このゴブリン軽視の風潮をすこしでもどうにかできないかと考え、そのためには必要なことを本気で考え始めたのだった。彼が本格的に動き出すのは数年後の話になるが、それが大きな波紋となつて各地に広がっていくとは今は誰もが想像していなかつた。

2時間程経つた頃にスレイは顔を上げた。

「参考にはなりそうか?」

「ああ、感謝する。これでゴブリンを更に駆逐できる」

「それは良かつた。その資料から得られた知識はどんどん使って構わない。その代わり、一つやつて欲しいことがある」

「何だ」

「ゴブリンについての詳しい知識を持つている人物、又はゴブリンを分析できる人間を探して見てくれ。その資料の内容は俺一人の経験からきているから、どんな偏りがあるか未知数だ。だから最低でもあと1人、ゴブリンについて冷静に考えられる人が欲しい」

「成る程」

薬使いはあくまで薬師なので、ゴブリンを解体したこともなければ、必要以上にゴブリンについて研究したこともない。彼にとつて重要なのは自分の毒で奴らが殺せるかどうかである。

要なのは自分の毒で奴らが殺せるかどうかである。

そのため、殺せればそれ以上の研究はしていない。この本の中身を使うならその知識を活かしながらも、自分の考えを持つて分析し立証できる人物が必要なのだ。

「その資料を持つていってくれていい。期間は設けないけど、そんな人物が見つかった時はその人にも資料を見て参考にしてもらつてくれ」

「分かった。探して見る」

アレイは神官見習いに見送られ帰つていった

「兄さんは先程の条件は合意方が見つかると思いますが？」

一正直難しい。現代のエブリイン軽視はかなり深刻だからなあ、居たとしてもその数はかなり少ないだろうな。けど、探さなければ見つかり

「そうですか。私、地母神にお祈りしま

「そうだな。頼むよ」

その数日後、条件に合う人物を見つけたとスレイから報告された時は驚愕した薬使いだった。

「スレイが帰つてこない？」

うん、正確には帰つてきてもすぐに出かけちゃう……かな」

…………うん、正確には帰ってきてもすぐに出かけちやう……かな」  
薬使いは自宅で牛飼い娘から2回目の相談を持ちかけられていた。  
久しぶりに見た彼女は長かつた後ろ髪を肩に掛かるくらいまで切り、  
顔を隠す程長かつた前髪もバツサリ切るなど大きなイメチェンをし

魔女にアドバイスされたらしい（さすがは魔女だと思つた薬使い）だが、本来なら明るい印象を持たせるであろう髪型も彼女の表情が暗いことで効果が半減させていた。

「叔父さんが言うには……媚……じゃ……つて」「ごめん。今なんて？」

「娼婦に、はまつてゐるぢやないかつて！」

「…………」

牛飼い娘が顔を真っ赤に染めて叫んだ内容に薬使いは一瞬思考が停止する。しかし、即座にその可能性を切つて捨てた。

「娼婦か……ないな」

こう考えるのも無理はない。彼にとつてスレイとは（かなり失礼だが）まともに性的な欲求があるかどうかも疑わしい人間なのだ。

突然だか、薬使いには容姿レベルの高い女性の知り合いが多くいる。ぱつと思い付くだけでも、明るくスタイルも良い新人受付嬢、色気を纏い男を誘惑する肉感的な身体を持つ魔女、美術品の様な美しくも豊満な身体の剣の乙女など、薬使いは絶世の美女と呼ばれる人物とも知り合っている（義妹はまだ10歳なので除外）

しかし、彼の中ではその内の誰が迫つてもスレイが肉体関係を結ぶ姿が全く想像できないのだ。

「…………かな？」

「ああ、ありえない。例え、スレイが女性と行動を共にしていたとしても、それはその女性に好意を持っているからぢやない。断言できる」現時点でスレイを落とせる人物がいるとしたら、目の前の牛飼い娘だけであると薬使いは本気で思つている。

スレイが心を最も許している彼女でさえも肉体関係まで行くのはかなりの時間がかかるとも分析しているので、ぽつとでの娼婦など論外なのだ。

「なら、どうして家にいてくれないのかな？殆ど休んでもくれないし」「俺はスレイじやないからはつきりとは言えないが、ゴブリンへ憎悪が静まつていないつてことなんぢやないか？」

冒険者になつて数ヶ月が経ち。普通のゴブリンなら危なげなく殺せる様になつたスレイ。

今までできなつた怨敵の駆逐ができるようになり、感情を込めて殺せる様になつたことで彼の中の憎惡の炎が今一度燃え上がり始めたのだろう。

「そつか………彼らしいな…私には何もできないのかな？」

ゴブリン狂いと言つても過言ではない今のスレイが人間性を保つてゐるのは牛飼い娘の存在が大きいと薬使いは思つてゐる。牛飼い娘は唯一スレイがゴブリン以外で執着してゐる人物なのだ。

そうでなければ牛飼い娘の叔父の所とはいえ、他人の家に下宿などする男ではないだろうし、周囲に無理を言つてまで彼女の元に帰ろうともはしないはずだ。

現時点で十分役目を果たしていると言うのは簡単だが、思いつめた彼女に薬使いそんな言葉は言えなかつた。考えた末に薬使いはあることを思い付く。

「…………日常の時間を作るのはどうだ？」

「日常を作る？」

「今のスレイがゴブリン討伐しかしないのは、他にやることがないつていうのもあるんじやないか、他にやることがあつたらその時だけはゴブリンから離れられる筈…………たぶん」

「日常…………うん、考えてみる！」

牛飼い娘の目には強い意志が宿る。少しでもスレイに日常を満喫してもらうために彼女は燃えていた。  
「解決の糸口が見つかつた様で良かつたよ」

「うん。ありがとう！」

牛飼い娘に笑顔が戻る。

「スレイが無理していると思つたら、俺の名前を出しても構わないから止めてくれ。主治医からのドクターストップつてことですね。それができるくらいには信頼関係を結べていいと思うから」

「ふふ。わかつた」

「それとスレイが行つてゐる場所に一つ心当たりがあるからそちらを調べて見る」

「お願ひね。ふふ、お金出そうか？」

「そこは友人割引と初回割引でダダということにしどくから、次回からのご利用もお待ちしております」

笑顔で冗談を言つてきた牛飼い娘に、薬使いも大きさな動きで応じ

る。

「今日はありがとう。今度来るときは彼も連れてくるね」

「おお、待ってるよ」

「元気になつた牛飼い娘を見送つた薬使いは大きく息を吐く。

「良かつた。何とか解決できたああ」

今の牛飼い娘とスレイの関係はかなりデリケートな状態なので、薬使いも細心の注意をはらつて挑まなくてはならず、顔には出さないがそれなりに疲れるのだつた。

おまけ

「今日は義妹がいなくて良かつたな」

神官見習いの義妹がいたら、娼婦の話題あたりで顔を真っ赤に染めてオーバヒートしていたかもしねれない。

「少し残念かな」

(可愛らしく) 失神している姿も、少し見て見たいと思うこの男は、徐々にシスコン化が進行しているのだった。

## 第14話

「やあやあ、君が薬使い君だね。私は弧電の術師（アークメイジ）ゴブリンスレイヤー君と行動を共にしている者だ」

牛飼い娘が相談に訪れた次の日。薬使いの元にある人物が来訪する。来訪者は金髪に眼鏡をかけた知的な美女でローブを着ていることから術師だと思われる。

「いらっしゃい。まさか、そちらから来られるとは思いもしませんでしたよ。確かに私が薬使いです」

「敬語はよしてくれよ。私は素の君と話して見たくてここまで来たんだ」

どうやら弧電の術師は明確な目的を持つて現れらしい。

「わかつた敬語は辞める。それでどうして俺の家がわかつた？」

「街の人には聞けば一発だつたよ。君は自分が思っているより、有名人なのさ」

意外なことかもしれないが、薬使いは街の人と交流を持っている。義妹と買い物に行くことも多いからだ。

転んだ子供を見つければ傷薬を塗つてあげ、腰を痛めた老人を見つければ家まで背負つて行く。基本的に善人であることに加えて、慈悲の心を持つ義妹と一緒に来ることが多い薬使いは、自然と人助けをする機会が増えていき街の人達に顔と家の位置を覚えられたのだ。

「それでご用件は？」

「この資料を作った君と話がして見たかったのだよ。他にも目的はあるがそちらは後ほど話をさせてくれ」

「…………どうぞ」

薬使いは弧電の術師のどこか観察するような視線に疑問を覚えるが、どちらは後ほど話をさせてくれた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

飲み物を出した薬使いが椅子に座つたところで2人の対話が始まると。

「まずはお礼を言わせてもらうよ。君がゴブリンスレイヤー君に渡し

た資料は私達の大きな助けとなつた。あれのおかげでゴブリンの研究も進みが良かつたよ。」

「簡易な資料でも役に立つた様で何よりだ」

「これが私達が調べて分かつた分だ。活用してくれ」

「どうも」

人が何か研究する時に基礎となる情報（ある程度正しいことが前提）か有るか無いかでは効率の上で大きな差が生まれる。

「あの資料は中々の出来だつたよ。だからこそ、聞いてみたくなつたのさ。あの資料の元となつた君の経験を！」

弧電の術師の纏つている雰囲気に変化が起きる。何かのスイッチが入つたようだ。

この時、薬使いは氣づく「ヤベツ、こいつマジな人（マッド）だ」「さあ、聞かせてくれ。この部分はどの様な経験から来たものなんだい？」

研究者に限つたことではないが探究心が強い人間というのは何処にでもいる。だが、その中でも強すぎる探究心を持つ者の行動は時に狂氣的に見えるものなのだ。どうやら彼女はそれに近い人間の様だ。身を乗り出す彼女の顔には納得するまで帰らないと書いてあるかの様だつた。

「ふむふむ、なるほど。だからこの結論に至つたのか。次はこの部分だ」

「そこの部分は……」

彼女の探究心は留まる所をしらず、薬使いが1つ話せば4、5つの質問をしてくる。全てを話し終えて彼女が満足したのは4時間が経過した後だつた。

「いやあ、楽しかつたよ。君の経験とゴブリンの対する考え方とは一般のそれとは異なつていた。とても勉強になつたよ」

「…それは…良かつた」

話し終えた2人の様子は対照的で、弧電の術師は満面の笑みを浮かべ、薬使いは椅子の背もたれに身体を預けてぐつたりとしている。

「さて、有意義な話も聞けた上に君の人柄も理解できた。そこでもう

一つの用件に入らせてもらいたい」

「ああ、行つてたなそんな話」

質問タイムのあまりの長さに完全に忘れていた薬使い。

「それで本題の内容は？」

「君はゴブリンについて研究する気はないかい？」

「…………」

「習性や文字に言語。それらの正しい知識が広がればゴブリン軽視の世の中になんらかの変化が生まれるだろう。それを君にやつてほしいのだよ。期限は設けない、何年かかつてもいいから成し遂げてほしい」

「どうして俺に？」

「私の知る限り、ゴブリンを本気で調べ、戦っているのは彼（ゴブリンスレイヤー）と君くらいだ。彼はゴブリンを殲滅し、効率の良い殺し方を学ぶことがあっても、それを積極的に広めるタイプではない。ならば君に依頼するしかない。そうだろ？」

「確かに」

弧電の術師の下したスレイの評価に思わず大きく頷き納得する薬使い。

「それに私が頼まなくとも、ゴブリンの本当の姿を君は世に広めるつもりだつたのだろう？」

「…………現時点では人脈や実績など足りない物が山積みの状態で実行不可能だけどな。」

「なに、君ならできるさ。君と話して私はそう確信した」

「その謎の信頼が重い」

剣の乙女から信頼できる人物と評価され、弧電の術師にもゴブリン軽視の世の中を変えられる人物と評価をされた。薬使いは嬉しくもあるが重圧にもなつっていた。

「上手くいかなくても責任はとれないぞ。特に文字や言語の解明なんてできる気がしない」

「そこは、そういつたことに興味のある学者を探してくれればいい」「それなら…………何とかなるか。やれる限りやつてみよう」

「ありがとう。それが聞きたかった……これで思い残すことはない」

弧電の術師の後半の言葉は薬使いに聞こえなかつたが、彼女はそのまま話は続けた。

「さて、ここからは依頼を受けてもらう代わりに私から提供できる物について話そう。私が提供できる物それは人脉だ。それも各地にある学院に所属する者達との」

学院 大陸各地にある魔法と学に関わる機関のこと、魔法の研究や学問の追究を行つてゐる。その実績から国にも強い影響力を持っている。

「それはまた、すごいものを提供してくれるな」

「私の紹介状があれば、学院の者達も君の話を聞いてくれる筈だ」

「それを使ってゴブリンの真実を広げろと？」

「うん、頼んだよ」

「……学院つてマジかよ」

どんどん大きくなつていく話の規模に頭が痛くなる薬使いだつた。

「後は報酬だね。君は何を望む？これだけ時間のかかる依頼をしたんだ。私のできることなら何でもしよう。何でもだ」

弧電の術師は豊満な胸を強調しながら薬使いに近づいていく、その姿は実に色っぽかつた。しかし。

「特にいらないな。人脈を提供してくれるだけで充分だ」

「……君も彼も女に興味はないのかい？自信を失いそうだよ」

「あなたは美人だ。それは誰もが認めるだろ。俺も興味がないわけじゃない。だけど」

「だけど？」

「好きでもない女性と肉体関係をもつたとバレたら、義妹に嫌われるかもしれないから遠慮する」

薬使いの中では、美女を抱ける喜びより、義妹に嫌われた時の悲しみの方が大きいのだ（彼は立派なシスコンになつた）

「あははは！確かにそれは辛いね。わかつた報酬は私なりに考えて君に送ることにするよ」

「そうしてくれ」

「本当に君達（スレイと薬使い）は面白いな。それではよろしく頼むよ」

「ああ」

「私からの話はこれで終わりだよ。何か質問はあるかい？」

薬使いは少し考えてから質問する

「なら、二つ聞かせてくれ」

「何だい？」

「何故、こんなあなたに取つて一文の得にもならない依頼を俺にする？」

これまでの反応を見る限り、弧電の術師はゴブリンのことを何とも思っていない。恨みも恐れもない。端的に言つてどうでもいいのだ。そんな彼女がわざわざ報酬を用意し、人脈を提供してまで依頼を出す意味がわからないのだ。

「それが彼の、ゴブリンスレイヤー君の報酬となるからだ」

「スレイの？」

「私はこれから彼にある依頼を出す。私の夢の為に必要なことだが、かなりの危険が伴う。ならばそれに見合つた報酬を用意する必要がある」

「それがゴブリン軽視の世の中を変えることってわけか……」

このままスレイがゴブリンを狩り続けてもゴブリンを完全に殲滅することは恐らくできない。その上、ゴブリン軽視するこの世の中では、どれだけの人をゴブリンから救つても正当な評価はもらえない。ならば、そこから変えて行くしかない。彼女はそう考えたのだ。

「尊大な話だな」

「けど、不可能な話じゃない」

「……納得した。それじゃもう一つの質問だ。どうしてあなたが発表しない？」

薬使いは研究者ではないので自己流の研究はできても本職には及ばない。ならば学院に人脈を持ち研究者でもある弧電の術師が研究し、発表した方が周囲を納得させられるはずなのだ。しかし、彼女は

そうしない。

「……私は今回の依頼が成功して夢が叶つた時、旅立たなればならない。何時、戻つてくるかもわからないし容易に連絡も取れなくなる。だから手伝えないのさ」

弧電の術師は、夢への期待とスレイを手伝えないことへ残念さが混ざつた複雑な笑みを浮かべていた。

薬使いはその表情を見て、これ以上の質問を止めた。

「わかつた。俺からの質問は以上だ」

「よろしく頼むよ」

彼女は残つていたコップの中身を飲み干して立ち上がる。

「さて、私はお暇するとしてよう。君と話ができるよかつたよ」

「機会があればまたどうぞ」

「ふふ、そうしよう」

玄関に向かおうとした弧電の術師は途中で立ち止まって振り向いた。

「そうだ。参考までに聞かせてほしいのだが〈攻略するまで無限にゴブリンを生み出すダンジョン〉があつたら君はどう対処する？」

冗談と取られかねない内容だが、薬使いは顎に手を当てて真剣に考える。彼女が真剣だとわかつたからだ。

「無限か……倒しても無駄なら薬品を使って攻略までの時間を稼ぐな。眠らせたり、痺れされたり、死なないで程度に苦しめたりして」

「成る程、参考にさせてもらうよ」

弧電の術師は薬使いの家を後にした。

数日後、家を訪ねてきたスレイから弧電の術師が夢を叶え旅立つたことを聞いた薬使いだった。

おまけ

「報酬つてこれか」

薬使いの家に、弧電の術師が用意したと思われる大量の荷物が送られてくる。薬学の本や植物の図鑑など、どれも薬使いの知識を向上さ

せる物ばかりだつた。報酬としては文句はなしに素晴らしいかった。

問題があるとすれば。

「多すぎだろ」

数十冊の本に最新の調合器具などが薬使いの目の前に置かれていた。

「ど、」に置こう……」

全てを整理し終えるのに数日を要した薬使いだつた。

## 閑話

### 第15話

「ええっと、それでは対人訓練を開始します」

場所は薬使いの家の近くにある草原。参加メンバーは発案者の薬使いを含め、重戦士、女騎士、槍使い、男剣士、ゴブリンスレイヤーの6名である。

医療班として神官見習いと野伏が常駐しており、観客として魔女と牛飼い娘も来ている。

「よつしやあ！」↑槍使い

「腕がなるな」↑重戦士

「ふ、はしやぎすぎるなよ」↑女騎士

「あいつ、いいとこ見せるぞ！」↑男戦士

「…………」↑スレイ

戦士達は己が武器をぶつけ合う（刃物は歯を潰した物を用意しました）

「皆さん。無理はしないでくださいね！」↑神官見習い

「大丈夫かなあ、心配だよ」↑野伏

「大丈夫……よ。子供……じや……ないの……よ」↑魔女

「そういえば、彼の戦う所を見るのは初めてかも」↑牛飼い娘

そんな中、薬使いは。

「結構、本格的になつたなあ」

驚愕していた。

――

事の始まり一ヶ月前まで遡る。薬使いはスレイの健康診断をするために牧場を訪れている。

「……よし、身体に異常はないな」

「感謝する」

この健康診断は無理ばかりするスレイの身体をチエックするため、

2週間毎に行われている。

「しかし、傷跡が増えたなお前の身体。いくら牛飼い娘が薬を塗ってくれるからってあんまり無茶するなよ」

「問題ない」

「……そうかい」

現在、スレイの簡単な治療は牛飼い娘がやっている。スレイが依頼を終えて帰宅すると牛飼い娘による傷の確認が行われ、見つけた傷に薬を塗るのが彼女の役目となっているのだ。

「そういうお前はどうした？ やけに疲れている様に見えるが？」

「まあ、実際にかなり疲れてるな」

他人への興味が薄いスレイですら分かるほど、薬使いに顔には濃い疲労の色が見てとれた。

「前回の健康診断の時に、故郷の村に行くつて話はしたよな？」

「ああ」

「両親に神官見習いを紹介したまでは良かつたんだが、その後に俺の武術の師が現れた」

「後のことが予想できた」

武術の師（50歳男性）曰く、多くの実戦経験を積んだことで総合的には強くなっているが、技が雑になり、一撃の威力の低下して動きも硬くなっているらしい。

「問答無用で訓練場に連れてかれて、徹底的に鍛え直されたよ」

故郷での滞在期間である4日間、薬使いは地獄を見ることになったのだ（その時、薬使いの両親は新しくできた義理の娘をこれでもかと可愛がっていた）

「薬品をメインに使うお前でも、そこまで鍛える必要があるのか…」「（薬品はどこまで行つても消耗品であることは変わらない。いつ何時（なんどき）使えない状態に陥るかわからぬ。ならば、そんな時に最低限、逃げられるくらいの力はつけておけ、そうすれば生存率は大きく上昇する）」ってのが、師が俺に何度も言つた言葉だ」

薬使いの武術の師は、別に薬使いの薬品を否定しているわけではない。命のやり取りするなら常に最悪のケースを考えて用意するのが

当然であると言つてゐるのだ。

「まあ、前の教えてくれた転きや扱は二ハリン話代ても有用だから文句はない『その話、詳しく聞かせてくれ』

この時 薬使いは言葉を間違えがく「二二」（二二）の語句でも有用／＼の言葉を聞いてこの男が反応しない筈がないのだ。

らいの期間がかかつた?」

「ちよと落ち着く」うなズレイ】  
ヌノイはマシガントリウで

スレイはマシガントークで薬使いを聞いたたす。ただできえ疲れている薬使いは、この後のスレイの質問タイムにより更に疲弊するのだつた。

最近 会話や質問で疲弊させられることか増えたな」  
言葉はしつかり選んで発言しようと誓った薬使いだった。

それから2週間が経過し、薬使いとスレイはギルドで話をしていた。内容はスレイに教えた武術の動きが実戦で使えているかについてである。

「ボブを倒すのが前より楽になつた」

「まあ、通常の二二ハリンよりも二二ハリン向きの動きだからな」

あの後、二回戦に向いている動きを全て説明させられた薬使いは、そのままスレイにいくつかの動きを教えてることとなつた。

一定数いる。それは通常種のゴブリンが小さいからである。

武術 特に対人戦を目的とした体術は自分と同等か大きい相手を想定しているので、人間の子供程度の大きさしかないゴブリンと戦うことに向いていない。

攻撃の対象が小さければ攻撃は当てづらいし、掴み技も身長差があつて掴みづらい。それ故にゴブリン戦で体術の評価はあまり高くない。しかし、これが上位種であるボブゴブリンとなると話が違つてくる。

ボブゴブリンになると縦幅、横幅共に成人男を上回ってしまう。し

かし、武術とは自分より身体の大きな相手を倒すために編み出された技術。身体の構造が人間に似ているホブゴブリン相手なら十分な威力を発揮することができるのだ（因みに薬使いの武術の師は筋肉の動きからボブの動きを読み、相手の力を利用して投げ飛ばしていた）

「後は対人経験を積ん練度を上げることが重要だな」

「そうなのか」

「師曰く、手つ取り早く技の練度を上げたければ、人間相手に使つて見るのが一番らしい」

人間はゴブリンなどより遙かに頭を使つて戦つている。本能で戦つている者であつても、訓練で身につけた戦闘スタイルで戦つてるので、完全に頭を使わずに戦つてゐるわけではない。

それに対してゴブリンは技の訓練など殆どしていない。学習能力だけは高いので、人間の真似をするだけで簡単な技なら身につけることができるが、奴らは技術はそこで止まる。

奪うことしか頭にない奴らは身につけることはできてもそれを発展させることははないのだ

それに対して人間は、技を身につけてもそこで止まることなく、更なる努力を重ねて技の練度上げや新技の開発を目指すのだ。

「定期的に対人戦をすれば、ゴブリンの停滞した技など容易く対応できるようになるらしい」

「……」

「まあ、今は俺と模擬戦を定期的にやるのがいいんじゃないかな」

「そうだ」「なら、俺達も参加させてもらおう」お前は……重戦士

「私もいるぞ」

薬使いとスレイの会話に重戦士と女騎士が割り込んでくる。

重戦士　常人離れした体格を持つ黒髪の大男で背中には大剣を装備している。兄貴肌で面倒見が良く、年下に慕われる人物。

女騎士　甲冑に大楯、両手剣といった重装備を纏い、攻守共にバランスの取れた金髪の美女。下手な男より、男気に溢れた細かいことを気にしない人物。

「二党的面子との訓練もマンネリ化していてな。たまには別の奴とや

りたいんだ」

どうやら新しく刺激を求めているらしく、目がギラついている。

「私としてはどちらでもいいのだが、この男が聞かなくてな」

「なら、参加しないのか？」

「するさ、興味はあるからな」

人数が増えて困ることはないのでスレイと薬使いは参加を了承する。ここに重戦士と女騎士の参加が決定した。

「こうなると、もう少し面子が欲しいな。探してみるか」

参加する以上はこの2人に旨みが有った方がいい（薬使いとスレイでは力不足の訓練にならない可能性がある）

そう考えた薬使いは参加メンバーを探して、知り合いに声をかけて回り、槍使いと男剣士を確保したのだつた。

そして現在。くじ引きで決めた1組目が向かい合つている。（話し合つた結果、それぞれの最初の一戦だけは1試合ずつ行われることになつた）

- |     |             |
|-----|-------------|
| 1組目 | 薬使い v s 重戦士 |
| 2組目 | スレイ v s 女騎士 |
| 3組目 | 男剣士 v s 槍使い |

この表を見た観客達は思つた。

「「（薬使いさん（兄さん）大丈夫かな）」」

薬使い本人も「ヤバイ」と思つていた。模擬刀とはいえ、武器は大剣で振るうのは怪力の重戦士。当たれば骨くらい簡単へし折れる相手である。

そんな心配をよそに模擬戦は審判の女騎士の合図により開始される。誰もがすぐ終わると思つたが戦闘は意外にも薬使いが有利で続いていた。その理由は。

「ちいっ！ 予想以上に厄介だな。その薬品！」

「それが俺の戦闘スタイルだからつな！」

重戦士が模擬戦の開始前に、薬使いに薬品の使用を求めたからだ。重戦士としてはせつかく戦うのだから全力の薬使いと戦いたかつた

からだ。

その結果、薬使이는煙玉の牽制や、武術の歩法によるヒット&am  
p；アウエイ戦法で重戦士を翻弄する形となつた。

「うおっ！」

薬使이는腕の鉄甲を使つた受け流しを武術の師に徹底的に叩き込まれている。重戦士の大剣を避けられないと見るや、威力が乗る前に受けとめて攻撃を流し、威力が乗つた攻撃が来ても後ろに回避しながら受け止めてダメージを最小限に抑えてしまうので決定打にならないのだ。

「それまで！」

審判役の女騎士の合図で模擬戦が終わりをつげる。結果は大振りの一撃を回避された重戦士が隙を突かれて武器を奪われたことで薬使いの勝ちとなつた。

「焦れて大振りになつて負けるとは情けないぞ」

「うるせえ、お前も戦つて見ればあいつの厄介さがわかる」

「無論そのつもりだ」

重戦士は女騎士が話し、薬使이는スレイと話しをしていた。

「どうだ？」

「今はまだ勝てる……けど将来のことを考えると末恐ろしいな」

薬使이는武術の師を持ち、5年をかけて今の実力に至つた。それに対して重戦士は完全に我流、師もいなければ効率良い鍛え方をしたわけでもない。そんな重戦士の力任せの攻撃に薬使이는何度か冷やつとさせられている。

今でこれなら数年後には加速香などの強力な薬品を使わなければ手も足も出なくなる可能性が高いのだ。

この後も模擬戦は続けられ、最終的な結果は

薬使ひ	4勝1敗	(槍使ひに敗北)
重戦士	3勝2敗	(薬使ひと女騎士に敗北)
女騎士	3勝2敗	(薬使ひとスレイに敗北)
槍使ひ	4勝1敗	(重戦士に敗北)

男戦士 1勝4敗（スレイにのみ勝利）

スレイ 1勝4敗（女騎士にのみ勝利）

となつた。

「スレイは女騎士に勝つたか」

「運が良かつただけだ。もつと鍛える必要がある」

スレイは彼の柔軟な発想力からくる、型にはまらない動きを駆使して女騎士に勝利した。男戦士ともいい勝負したが、1戦目のダメージが身体に残っていたため力が出しきれず敗北

薬使いは槍使いの繰り出す中距離からの我武者羅な連続攻撃で、薬品が上手く使えなかつことにより敗北。

他のメンバーも相性の問題もあるが一度は負けているので敗北から学べることはあるようだ。

「よつしやあ、次こそ全勝だ！」

「今度負けねえ！鍛え直しだ」

槍使いと重戦士は次の模擬戦に向けての闘志を燃やし。

「どうやら、私は考え方が硬い様だ。もう少し柔らかくする必要があるな」

「……良い経験になつた。だが、確實にゴブリンを殺せる様になるにはまだ足りないな」

女騎士とスレイは己を冷静に分析している。

「くそお、もつと良いとこ見せたかった」

「大丈夫。かつこよがつたよ」

嫁さんに良いところ見せられずに落ち込んでいた男戦士に、慰める奥さん（彼女曰く、必死で戦う姿に惚れ直したそうだ）

「みんな…何か…学べた…よう…ね」

「すつすごかつた。負けちゃつたけど彼も頑張ったし、今日の晩御飯はシチュードにしよう！」

魔女は笑顔で皆を見ており、牛飼い娘はスレイのために彼の好物を作ること決めた。

「お疲れ様です兄さん。やつて見てどうでしたか？」

「疲れたけど得られるもの多かつたな。そのうちまたやるかな」

「その時も呼んでくださいね。頑張つてお手伝いします！」

薬使いも大きな問題なく終えられたことに安堵し、医療班として来てくれた義妹にも何かお礼をしなければと考えていた。

こうして〈対人訓練〉が幕を閉じた。

この訓練は参加メンバーには好評であつたため定期的に行われることになり、彼らの実力アップに繋がっていくのだった。

おまけ

「薬使い！次の模擬戦はいつだ!?」

「俺は明日でもいいぞ」

「まだ、1回目が終わつたから1週間しか経つてない！もうすこし我慢しろ！やるとしても一ヶ月に一回だ」

前回の模擬戦で火のついた野郎2人に頻繁に詰め寄られることになつた薬使いだつた。

「遂に完成したな」

そういつた薬使いの前には一冊の本が置かれていた。題名は＜The Goblin Truth＞ゴブリンの真実

薬使いが多く協力者達と共に三年を費やして集めに集めたゴブリンの本当の姿が書かれた本である。

本には現時点では分かっているゴブリンの生態、危険性、戦闘力、上位種の存在のほかに、滅ぼされた村の姿、返り討ちにされた冒險者（仮名）の末路と敗北した理由などがメインに記されている。

世界の常識の1つを変えるかもしれない本、それを書き終えた薬使いが最初にしたのは

「はああああー」

大きな溜め息を吐くことだつた。

「ああああ！ やりたくないなあ！ 目立たたくない！」

薬使いはこの本が世の中に大きな波紋を生じさせることを知っている。＜ゴブリンは弱い＞そんなたつた一つの間違った認識は世界中に広まっている。一般人だけでなく、権力者や有名な知識人、果ては実際に戦うはずの冒險者にまで、その認識は根付いているのだ。

そんな考えを変えようしているのだ。その苦労は常人の想像を遥かに凌ぐことになるだろう。

そして、この本の作者である彼はその苦労を先頭に立つて受けなければならない。それは想像するだけで気持ちが落ち込みそうになるほど困難な道だ。いくら薬使いが数年をかけて準備してきたとはいえ、彼がこれから体験するだろう苦労をどれだけ軽減でかるかは未知数である。

「でも、やるしかないんだよな。被害者を減らすためにも自分のためにも」

今更だが、薬使いはゴブリンと頻繁に遭遇する。誰かが狙っているのではないかと思う程に。

顔を見ただけで不快な気持ちになるほど嫌いなのに遭遇してしまった。近づかない様にしても向こうから近づいてくるのだからどうしようもなかつた。そしてゴブリンと遭遇すると高確率で胸糞悪い光景を目にすることなる。

薬使いは本気でゴブリンを嫌つてゐる。だが、それ以上に奴らが作り出す凄惨な光景を見るのが何より嫌いだつた。

だから彼は考え、ある結論を出したくこんな光景を少しでも見なくてもいい様にするには、一匹でも多く数を減らして奴らとの遭遇率を下げるしかない〉と。しかし、薬使いがいくら頑張つても狩れるゴブリンの数など、ゴブリンの総数から見ればチリに等しい数でしかない。ならばどうするか、そうして考えついた。1人でダメならもつと多くの人間にゴブリンを狩つて貰うしかない。だが、挑んだものが油断して返り討ちされている様では意味がない。返り討ちにされた者たちの中に女性がいれば寧ろ数を増やすことになる。

そうなると薬使いにできる手は一つしかなかつた。それが〈ゴブリンの真実の姿を世界中に広げ、正しい認識をもつた者達を増やすことで、奴らを一匹でも多く駆除してもらい総数を減らす。そしてゴブリンの被害とそれを自分が見る確率を減らす〉というものだつた。

だから、彼は冒険者になつた。第4位（銅）まで等級を上げ、信頼を勝ち取り、力のある者との繋がりを持ち、発言力を手に入れた。全てはゴブリンが一匹でも多く狩られる世界を作るために。

冒険者になつた当初は似た考えを持つた人と出会えれば、その人を補助して実現するのも良いと考えていたが、薬使いの目的実現への道はそんなに甘くなかった。そういうた人物が見つかるどころか、周囲に支持され、より自分がやるしかないことを強く認識させられることになつたのだ。そうして薬使いは覚悟決めた。必ずやり遂げると。だが……

「ちくしょう！ やはり目立たたくない！ わかつてゐる。誰にも頼めないこととも！」

別に薬使いは目立つことが苦手なわけではない。必要なら少しくらい目立つことも厭わない。しかし、本の内容が広がれば世界規模で

有名になることだろう。それ程までに目立つのは流石にキツイものがあつたのだ。

薬使いはそれから数時間程、葛藤し、その日は眠りについた。

その日が義妹である神官見習いがいる日であれば葛藤する薬使いに慈愛に満ちた目を向けていたことだろう。

次日の日から薬使いは、このThe Goblin Truthを様々な場所から世に広めるために動き始めた。初めに行つたのは彼の所属する〈辺境の街の冒険者ギルド〉の長に完成した本（複製）を渡すことだった。ギルド長に冒険者ギルドの本部にこの本を回してもらえる様に頼むためだ。

「それではよろしくお願ひします」

「分かりました。しかし、よろしいのですか？例えこの本を送つたとしても上の者が読むかどうかも分かりませんよ？」

辺境の街のギルド長である男性は心苦しそうにそう告げた。

「構いません。重要なのは送つたという事実です。世界に広げるのはこちらでやりますので」

ギルドの元締めがどの様な人物かは不明だが、ゴブリンの本を送つても読まずに捨てられる可能はある。薬使いもその可能性は考へている。重要なのは送つたという事実、世界の認識が変わるかもしれないという変化の中で除け者にしてはいないと伝える為の行動なのだ。  
「……そこまで覚悟をお持ちですか？分かりました。ですが、私はこのThe Goblin Truthを無駄にする気はありません。私自身が本部にこれを届け、全力で動いてくれる様に説得を試みます」

ギルド長の目には決意が宿っていた。彼もゴブリン軽視の風潮により、将来有望な若い冒険者達が死んでいくのを快く思つていない人だつたのだ。

「よろしくお願ひします。この風潮を変えましょ」

「はい。全力を尽くします」

2人は固く手を握り合つた。

次に向かったのは水の街の神殿。今回は義妹も一緒である。目的

は2つあり、両方とも剣の乙女に関わることだつた。普段から忙しい彼女だが、予め対談を申し込んでいたのですぐ会うことができた。

「お久しぶりですね薬使いさん、神官見習いさん。お元気そうで何やりです」

「お久しぶりです。おかげさまで元気にやつてます。本日は対談を許していただき、ありがとうございます」

「また、お会いできて嬉しいです。剣の乙女様」

薬使いは本の完成が近くなつた時点で剣の乙女に手紙を送つていた。近々対談をお願いしたいと。返事はすぐに送られてきた「いつでも歓迎いたします」と。あまりにも素早い返事に送つた側の薬使いが驚愕することになつた。

「それが〈The Goblin Truth〉遂に完成したのですね」

「はい、3年も時間が掛かつてしましましたが完成しました」

「本当にお疲れ様です。読んでいただいてよろしいですか？」

剣の乙女は目が悪い。彼女曰く若い頃に失敗してしまい、その時の怪我で視力が低下し輪郭がわかる程度しか見えないらしい。

「勿論です。ですが、その前に一つ試していただきたいことがあるのです」

「あら、何でしよう?」

「義妹よ。頼む」

「はつはい。頑張ります!」

神官見習いが立ち上がり剣の乙女の前に立つ。

「あの一体、何を?」

「今から剣の乙女様に義妹が小回復（ヒール）を使います」

「ヒールですか？ですが、わたくしは怪我をしておりませんが？」

「ぬか喜びをさせてしまう可能性があるので、詳細は後ほど説明させていただきたいのです。ヒールですので失敗しても害がないことは保証します。どうか私達を信じていただけないでしょうか？」

座っている薬使いも目の前に立っている神官見習いも真剣であることが気配で分かつた剣の乙女は…

「……わかりました。お一人ならわたくしに害のあることはしないと信じられます。神官見習いさんお願ひしますわ」

「はい。全力を尽くします！いと慈悲深き地母神よ、どうかこの者の傷に、御手をお触れください。ヒール！」

神官見習いのヒールが発動し、剣の乙女の目の部分だけで2回光り。光が収束して消える。

「失礼します」

神官見習いはヒールの光が消えるのを確認した後、剣の乙女の顔、正確には眼に巻いている黒い布に手を伸ばしそれを外した。

「いかがですか？」

「いかがと言われましても…………あら？」

剣の乙女は気づいた。目の前いる神官見習いはともかく、机を挟んで対面にいる薬使いの顔が見えているのだ。輪郭ではなく細部まで。「どうして……見えるのですか？わたくしの眼はもう…」

「神官見習いのヒールには傷をおつた箇所を〈負う前の状態に戻す〉効果あるようなんです。それは古傷であつても効果を及ぼします」

「そんなことが？」

神官見習いヒールについてわかっていること

①通常のヒールと違ひ傷を塞ぐのではなく、傷を負う前の状態に近づける力がある（傷口を注意深く観察しないと塞いだのか怪我をする前に戻ったのかわかりづらく、気づくのに時間がかかった）  
②ヒールの光が当たる場所を限定することで効果を高めることができること

③あくまでも小回復（ヒール）であるため、深い傷や欠損した部位には効果が薄い。

剣の乙女の視力低下は眼に負った火傷が原因だつたが、幸い眼球そのものには火傷以外の傷はなく、神官見習いのヒールで眼球の傷を、負う前に戻すことで視力を取り戻させることができたのだ（効果上げるため範囲を限定し両目に一度ずつヒールをしている）

野伏の時は、意識不明の原因が頭部にあつたらしく、その部分がヒールにより傷を負う前に戻されたことで意識を取り戻したということらしい（頭部はアリケートな部分なので完全な証明は現時点では不可能）

その効果を知った当時、薬使いは「奇跡ってなんでもありだな」と思つたそうだ。

「では、わたくしの眼は治つたの……ですね？」

「そうなります。デタラメな力すぎて医療関係者としては微妙な気持ちですが」

「デタラメつて酷いです。兄さん」

「悪い悪い」

「ぶんすか、怒る神官見習いを諫めつつ説明を続けた。

「私は一度、席を外します」

「あつ待つてください兄さん」

説明を終えた薬使いは立ち上がり、その場を神官見習いを連れて離れた。その理由は剣の乙女の涙を流していたからだ。二度と戻ることのないと思っていた眼が治つたのだ。その喜びは相当なものだったろう。

〈The Goblin Truth〉を作るにあつて薬使いは多くの人に助けられた。その中でも剣の乙女は薬使いが申し訳なくなる程の援助をしてくれた。調査に必要な人材や街の有力者などを紹介し、金銭面でも多額寄付をしてくれた（渡されたときは金額のあまりの多さに手が震え、本当に必要な分以外はお返しした）

彼女がそこまでしてくれる理由はわからないがここまでしてくれた以上、何かお礼をしなければと薬使いは常々思つていた。そこで思ついたのは彼女の眼の治療だった。

剣の乙女の眼については一年程前、診察したことがあつたので症状は理解していた。そして色々考えた結果、神官見習いのヒールなら治療できるのではないかと薬使いは思つたのだ。

「剣の乙女様の視力が戻つて本当に良かつたですね。兄さん！」

「ああ、成功する可能性は高いと思つていたけど、内心ガタブルだつた

よ。本当に良かった。ありがとな、自慢の義妹よ」

「えへへ、私の授かつた奇跡が剣の乙女様のお役に立てて本当に嬉しいです」

憧れの存在の力になれた。神官見習いにとつて今回の治療は彼女の自信に繋がることだろう。

30分程して戻ると先程より落ち着いた剣の乙女が待っていた。本気で感謝され治療代を払うとまで言われたが、それではお礼にならないので断つた。そして現在、彼女は〈The Goblin Truth〉を読んでいる。

「成る程、素晴らしい出来栄えです。これなら有力者達が読んでも納得させることができるのでしよう」

「ありがとうございます」

薬使いはこの本を書くにあたつて文章の書き方を猛勉強した。弧電の術師が送ってきた本の中にも文章の書き方を記した本があつたので何度も読み返し、冒險者ギルドにいる学院の卒業生にも読んでもらい何度も手直しした。

「この書籍はわたくしが信頼できる有力者に広げていきましょう。何かあれば直接説明しに来ていただきますがよろしいですか？」

「大丈夫です。よろしくお願ひします」

剣の乙女が本の内容を有力者に広げてくれれば、薬使いが彼らと直接話すより納得させやすいのでありがたい話だつた。

「それで貴方達はこれからどう動かれるのですか？」

「日にちは少し空ますが、学院に行くことになつてます。学院の代表者達に認めて貰えれば、本の内容を頭ごなしに否定できる人物はかなり少なくなりますから」

学院に認められた本、少しでも学のあるものなら、それを否定できる者はほとんどいない。学のある者に取つてそれほど学院の存在は大きいのだ。

「成る程、大変なのはこれならなのですね」

これまで薬使いが本の内容を話した相手の多くはゴブリン軽視の

風潮を変えることに肯定的だつた。しかし、次に行く学院などはそうではない。日々、何かを学び、研究に明け暮れる彼らに取つて、新しく入つてくる知識は歓迎するものであると同時に否定するものもあるのだ。

彼らは、どんなに人の役に立つ素晴らしい知識でも納得しなければ受け入れない。彼らは自分が納得するまで様々な質問をぶつける。質問の中に新しい知識に対しても否定的なものも含むまれ、それら全てに対応して初めて彼らを味方につけることができるのだ。厳しい分、一度味方につけると頼もしい存在もある。

「これはわたくしからの推薦状です。どこまで役に立つか分かりませんがお使いください。良い結果になる様に祈っております」「重ね重ねありがとうございます。学院の方々を納得させて見せます」

「神官見習いさんも、お兄さんを支えてあげてくださいね」

「はい！頑張ります」

薬使いと神官見習いは剣の乙女に深々と下げて帰路についた。

ここまで順調だつた。いや、順調過ぎた。順調過ぎる時ほどアクシデントはやつてくる。

それがやつてきたのは水の街から戻つて2週間後のことだつた。予定では剣の乙女との対談の1週間後には学院で代表者達と対談しているはずなのだが、学院側でトラブルがあつたらしく、対談は来週に延期となつていた。

その空いた期間にある人物が薬使いを訪ねてきたのだ。その人物は少し前に「The Goblin Truth」を渡した。冒険者ギルドのギルド長だつた。

「突然訪問してしまつてすみません」

「いえ、ここ数日はやることも落ち着いていますので大丈夫ですよ。それでどうかしましたか？」

「はい。薬使いさんとの対談後、私が冒険者ギルドの本部にあの本を

届けに行つたのはご存じですか？」

「はい。その件は深く感謝しています」

「私は私の意思のもと、行動したのでお気になさらず。それで今日の朝になつて本部から手紙が来たのです」

冒険者ギルド本部は予想以上に素早く動いたようだ。

「私はその結果を見て、正直ありえないと思いました」

「……何が書かれていたのですか」

「その前に結論から先に言わせてもらいます。……私は……私は

⋮

〈私は The Goblin Trust

hをこれ以上、世に出すのは反対です〉

## 第17話

〈私はThe Goblin Truthを  
これ以上、世に出すことは反対です〉

「…………」

ギルド長のその言葉に対しても、薬使いは言葉を返せなかつた。  
「…………いつたい何があつたのですか？」

大きく息を吐くことで余計な感情を排除し、冷静さを取り戻すこと成功した薬使いは、ギルド長に先程の言葉の真意を聞くことにした。強い熱意を持つて協力を約束してくれたギルド長がこの様な発言をするにはそれなりの理由があるはずだからだ。

「…………」の手紙は本部にいる同期の友人が届けてくれたのですがギルド長は手紙の内容と、この手紙を届けてくれたギルド長の友人から聞いた話を語ってくれた。

The Goblin Truthの内容は、冒険者ギルドの本部に大きな衝撃を与え、幹部による緊急会議がすぐに開かれ激しい議論が交わされる事になつた。

普段から否定的な意見ばかり述べる幹部もいたらしいが、その幹部でもThe Goblin Truthの内容を否定することはできなかつた。何故ならその幹部は元冒険者で本の内容にいくつもの心当たりがあつたからだ。

冒険者ギルドの幹部の中には元冒険者だつた者も少なくない。現役時代に積んだ多くの実績が彼らを今の地位まで押し上げだと言つても過言ではないのだ。そんな彼らをもつてしても何の矛盾点も見つけられなかつた事からThe Goblin Truthに書かれた内容の信憑性は極めて高いと決定づけられたのだ。

内容は認められた。次に議論されるのは何故、このThe Goblin Truthが出されるまで、誰もこのゴブリン軽視の風潮を否定してこなかつたのかについてである。

「ゴブリンは決して弱い魔物ではない」この事実は少し調べればわかることだ。滅ぼされた村や、多くの冒険者達がゴブリンに敗北した理由。それについて少しでも考え、調べていれば、このゴブリンは軽視の風潮はここまで酷いことにはならかっただろう。

「冒険者の生死は自己責任」これは冒険者の原則である。それ故、冒険者ギルドに罰則などはない。しかし、ゴブリンと戦う仕事を斡旋する冒険者ギルドが、ゴブリンの間違った情報を否定しないばかりが、調べもせずに放置してきたことは、多くの若い冒険者達を死なせる要因の一つとなつたのは否定できない事実だつた。この事実が広がれば冒険者ギルドに対する世論の声は決して良いもとのはならないだろう。

そのことに気づいたことで罪のなすりつけ合いをする幹部まで出たらしい（トップが一喝することで何とかこの場を鎮めた）

ここまで会議は荒れはしたが何とか話を進めることができた。問題なのは最後の議題である

「ゴブリンの討伐に関する難度の変更及び、それに伴う依頼料の増額」についてである。この問題は激しい議論が交わされ、未だに完全決着がついていないらしい。

「ゴブリンは弱い」それ故に依頼料も安く、小さな村でも何とか依頼料を捻出できていた。しかし、討伐難度が上がり、依頼量が上がれば、討伐依頼を出すことすらできない村が出るかもしれないのだ。特にゴブリン討伐は依頼を受けて現場に行き、実際に戦つてみなければ難度が判断できないのが問題だつた。巣の規模はどのくらいなのか、上位種がいるのかなど巣の状態により、難度が変化してしまうのだ。

依頼料の設定を、高い難度に合わせるのか、低い難度に合わせるか、それともその中間の金額にするのか、いつも毎回調査員を送るかなど、様々な意見が出て中々決まらないらしい。手紙には仮の金額が書いてあるのが、それもどこまで信用していいのかわからなかつた。仮に高い難度に合わせた料金にしてしまえば小さな村に払える金額ではなくなつてしまふ。中間や低い難易度に合わせた金額の場合

は、依頼を受ける冒険者が減少する可能性がある。苦労して上位種達を倒しても、それに見合わない金額しか貰えないのなら受けたくないと思う冒険者が出て不思議はない。

何より、一度、依頼料が正式に決まつてしまえば、再度変更するのに数ヶ月から半年の時間がかかってしまう。その間、料金を払えない村は例えゴブリンに襲われても、冒険者に助けを求めることができないくなってしまうのだ。

「……私も若い冒険者達は助けたい。しかし、そのために小さな村を見捨てる事になるなら、私は賛成できません。どうかこの本をこれ以上世に広めず、ギルドへの申請も取り下げる下さいのです」

「………」

頭を下げるギルド長に対して薬使いは、大きな反応はせずに無言で本部から送られてきた手紙を見ていた。その表情は決して良いものではなかつた。

依頼料の増額。それ自体は薬使いも想定していた。The Goblin Truthを書くにあたつて薬使いは様々な人達と意見を交わしてきた。その中には当然依頼料の増額の話は出ている。そのため〈依頼料の増額〉に対して薬使いはいくつかの対策を準備していた。

国への補助金の申請や、ゴブリンの被害で損害を負うことなる有力者との援助の約束など、増額分を余裕を相殺出来る様に準備していたのだ。、

しかし、仮決定で出された金額は、上記の対策をもつてしてもギリギリ相殺することができる額だったのだ。今後、依頼料の正式決定で決められた金額が、現時点の仮決定金額より高く設定されれば相殺しきれない可能性が高いのだ

「貴方がこのThe Goblin Truthを作るのにあたつてどのような覚悟され、どれほど苦労をされたのは私には想像すらできません。しかし、それほど曲げてでも、お願ひしたいのです！」

「………」

小さな村では払えない金額になるかもしれない。その危険性があ

ることを理解した上でこのまま進むのであれば、それはゴブリン軽視の風潮を変えるためならば、小さな村くらい切り捨てても構わないと思っていると、言ってしまうのだ。

薬使いは長い長い沈黙の後、口を開いた。

「……時間をください。このThe Goblin Truthは様々な人の力を借りて作り上げたものです。私1人の意思で勝手に決めていいことではないのです」

「わかりました。協力すると言つておきながら、この様なお願いをして本当に申し訳ない」

ギルド長は神妙な面持ちで深く頭を下げた後、薬使いの家を去つていった。残された薬使いは椅子に座つたまま、天上に向けて一言だけ呟く。

「想定が甘かつたかな……」

成功目前で叩き落とされた薬使いのダメージはかなりのものだ。被害者を減らすためにはゴブリン軽視の風潮を変えなければならぬ。しかし、それを行うためには、最も被害に遭う可能性が高い人達を見捨てる形になるかもしれない。そのこと覚悟しなければならない。そんな決断が18歳の若者に簡単に下せる訳がなかつた。

実の所を言うと、薬使い達が予め計算し算出した増額料金の想定は間違つていらない。例え、The Goblin Truthがギルドに認められ、それを踏まえた上で増額分を決定したとしても、準備していた援助金で余裕をもつて相殺できる金額になるはずなのだ。ではどうして、こんなにも仮決定で下された増額分が多いのか、そこには人の悪意が関わっている。

冒険者ギルドの本部で会議が行われたとき、そこには当然複数の幹部達が集まっていた。そしてThe Goblin Truthの内容が認められたことで、ギルドの責任が問われる可能性まで出てきた。

そんな中、1人の幹部は思った「責任を負いたくない」責任の取り

方も、誰が責任を取るのかも決まった訳でないが、その幹部にはそんなことはどうでも良かつた。幹部にとつて重要なのは責任を負わせされて今の地位を失う可能性がすこしもある、それだけで動くには十分な理由だつた。そしてその幹部は（無駄な悪知恵を働くかせて）考え最後の悪足掻きに出た。

それはこの後に行われる。ゴブリン金額の増額分を話し合いでワザと高い金額を提案するということだつた。通常の会議ではこの様な手は通用しない。少し冷静に考えればその金額が高すぎることは誰にでも分かること事だからだ。しかし、今回だけは違う。

The Goblin Truthの登場で彼らの中にあるゴブリン討伐における依頼料の基準は既に粉々になつていたからだ。その場にいる他の幹部達も適正金額がいくらなのか分からなくなつていたのだ。

それ故にその幹部は（無駄に回る舌で）ワザと話し合いを長引かせてその場での決定を見送らせた。そして仮決定で高い金額を出させたのだ。

正式決定であればこの様な金額は通ることはなかつただろう。しかし、仮決定であれば後で修正可能なのでその場では通つてしまつたのだ。

そうして決まつた仮決定金額が（辺境の街のギルド経由で）薬使いに伝わる様にしたのだ。薬使いの人柄や実績は会議の最初に説明されていた。その説明から薬使いが小さな村を見捨てられない人物であると分析した幹部は、薬使いが自分からThe Goblin Truthの承認を辞退する様に仕向けたのだ。咄嗟に思いついたにしてはよく計算された悪魔的な策略である。

だが、この策略には複数の穴がある。1つ目は幹部の1人でしかなりその男の発言のみでは会議を長引かせることも仮決定の金額を吊り上げて高く設定することは難しいことだ。それができたのは彼の考えに同調する幹部が他にもいたからだ。他の幹部達がどう考えたいたかは不明だが、責任の問題で混乱した彼らは目の前ぶら下がつた餌に咄嗟に食いついてしまつたのだ。一度食いついてしまつたら

彼らもう逃げられない。傍観者から運命共同体に早変わりしたのだ。

2つ目は依頼料の決める会議が再度行われる前（次に幹部達が集まる5日後に決定）に薬使いがThe Goblin Truthの承認取り消しを申請しなければ、前回の会議で明らかにおかしい金額を提示した者たちがいたことを良識のある幹部達に追及されてしまうが高いのだ。そうなれば増額する分の金額を意図的に吊り上げた幹部達のエリート街道は終わりを告げることだろう。最悪、罪に問われるかもしれない。

穴だらけの策略だが、その幹部にはそれしか縋れるものがなかつたのだ（成功したからといって幹部達が後から罪に問われない保証はどこにもないことには気づいていない）

流石の薬使い達も、人の悪意による依頼料の増額分までは計算に入れていたかった。穴だらけの策略だが、この行動は薬使いに確かなダメージを与えることになったのだ。

これからどうするか、協力者にどう話すか、薬使いは何も決められないまま、次の日を迎えることになった。

ギルド長が訪れた次の日、薬使いは神殿にいた。その理由は神官見習いが彼を連れてきたからだ。

「義妹よ、おまえの気持ちは嬉しいが、俺は一刻も早く、みんなに今回の件を伝えないといけないんだ。今は祈つてのすら時間すら惜しい」「兄さん……ダメです。今の兄さんはいつも兄さんではありません」

神官見習いは霸気がない薬使いの瞳を真っ直ぐ見つめる。その瞳には――――――――――――――決して譲らないという意思が感じられた。

「そんな兄さんでは、これからどうするにしても良い考えが浮かぶとは私は思いません。ですから兄さんには一度、休んでもらいます。」

彼女は薬使いの手を引き、神殿の中庭にある太陽が当たる長椅子に彼を座らせた。そしてふわりと笑う。

「それから考へても遅くはありません。それくらい皆さんも許してくれますよ」

「…………わかつた」

薬使いは神官見習いに導きかれるまま、隣に座つた彼女の膝に頭を乗せて眠りについた。

「薬使い殿はお休みになられましたか？」

「はい。神官長様」

薬使いが眠りに着いたのを見計らつて神官長が近づいてくる。

「彼がこうなるとは余程のことがあつたのですね。人払いはして置きました。今はゆつくり休ませてあげなさい」

「はい」

神官見習いは兄の寝顔を見ながら今朝のことを思い出す。彼女が帰つて見ると明らかに寝ていらない薬使いが、真剣ながらもどこか霸気のない瞳で何か考えて込んでいたのだ。彼女が帰つてくるまで朝になつたのすら薬使いは気づいていなかつた。

そんな薬使いを見た神官見習いは、とにかく彼を休ませることにした。しかし、家ではダメだ。とにかく場所を変えて気持ちを少しでも切り替えてから休ませる必要があると彼女は判断したのだ。

そこで選んだのが神殿だつた。基本的に静かで神聖な雰囲気のあるこの場所なら薬使いを休ませやすいと考えたからだ。思惑は成功し、眠つている薬使いの表情は穏やかだつた。

数時間後に起きた薬使いの表情には、先程とは違ひ確かな力を感じたられた。それを見た神官見習いは心から安堵したのだつた。

目覚めた薬使いは神官見習いと神官長に何があつたのか説明した。

「…………それは、何とも苦渋な決断ですな」

「酷すぎます！ ギルド本部は何を考えているのでしょうか？」

話しを聞いた神官長は悔しげ視線を落とし、神官見習いは仮決定とはいえ、そのような金額を提示した冒険者ギルドの本部に悲しみを覚えていた。

「冒険者ギルドに抗議文を出すのはどうでしょう？」

「有りだとは思いますが、本部がどんな意図を持つてこんな金額を

提示してきたのかが不明なのでどんくらい効果があるのか分からな  
いですよね…」

「それは……そうですね」

悪意ある策略が関わっていることを知らない彼らからしてみれば、  
ギルド本部に何か意図があると考えてしまうのだ。

「正直、現時点ではまともな解決策は俺は思い付ません」

「薬使い殿。今の言葉を聞くと、まともでなければ解決策が有ると聞  
こえたのですが？」

「……有るといえばあります。しかし、この対策には沢山の人手が必  
要な上に、その人達に少ない賃金で働いてもらわなければ成立しない  
方法なんです」

「……兄さん、それは…」

「分かってるよ。俺もこんな方法は使いたくないし使う気はない。そ  
れに、そもそもそんな都合良い人達がいるわけがないからな」

「一応、聞いてもよろしいですか？ その方法を」

「わかりました」

薬使いは2人に現時点で自分が思いつく（まともではない）解決策  
を話した。その話を聞いた2人も考えた末に実現は不可能だと判断  
し、その方法を諦めたのだった。

話に集中していた彼らは気づかなかつた。この話に聞き耳を立て  
ている人物がいたことを。その人物は話を聞くとすぐにその場を離  
れ、何処かに向かつていつたことを。

神官見習いの機転により、気持ちを持ち直した薬使いは協力者達に  
集まつて貰える様に連絡を取つた（全員が集まる様にするため、時  
間は夜にした）

「…………つて事なんだ」

薬使いは、集まつてくれた仲間達に手紙の内容を説明した。

「…………成る程、そんな事が…」 →スレイ

「おいおい、マジかよ」 →槍使い

「面倒なこと…に…なつた…わね」↑魔女

「なんだそりや、畜生！殴り込みに行つてやろうか」↑重戦主

「ハナを言ふな。それは何も解決はもたらんではないか」

卷之三

「おと やはり高いだよね？」↑牛餓い奴

くなります……↑受付窓

「…やつと、ここまで来た

「おつ落ち着いてみんなで考えれば、いい案がでるよ」→野伏

その場に集まつたメンバーは The Cobblers Truth

や槍使いといった冒険者のメンバーはゴブリン討伐で得た情報を、野伏や受付嬢、牛飼い娘といった非戦闘員のメンバーは外部（牛飼い娘なら牧場仲間や取引先、受付嬢なら王都の同僚など）からゴブリンの情報を集めてくれた。

ある（剣の乙女は連絡を取るだけで時間がかかるので特別枠）

古事記傳説の歴史

神官見習いの質問に答えを返せるものはいない。当然と言えば当然だ。問題の規模が規模である。そう簡単に解決策が見つかれば誰も苦労はしない。

「……やっぱり、有力者や知識人にも連絡を取つて見るべきなんだろうか…」

薬使いとしては有力や知識人にこの事を相談するのはできるだけ避けたかった。彼らの多くは自らの利益にために薬使いに協力している。そんな彼らに解決の糸口がまったく見えない問題があることを伝えれば協力を打ち切られる可能性があるからだ。

「兄さん、神殿で神官長様に説明した案を皆さんに話してみてはどうでしょう？」

「いや、あの案は使えないだろう」

「……何があるのか？」

「いや、スレイ。あるにはあるが現実じやない案だか「かまわない。話してくれ」……先に言つとくけど、これは致命的な問題のある案だからな」

皆が聞く体制に入ったのを見て薬使いは話し始める。薬使いの考えた方法。それは…：

国や有力者達の援助金で足りないなら、自分達で会社を作り、その会社の売り上げの中から足りない分を出してしまうという方法である。

しかし、これは非現実的な方法と言つてもいいレベルのものだ。この方法を使うにあたつて必要ことは3つ。

- ①売れる確率の高い商品
- ②製造する場所
- ③ゴブリン討伐の援助のために、労働量に対し安い賃金で働いてくれる人材

1つ目は、薬使いが新たに開発した薬や香水（主にリラックス効果のあるもの）を大量生産して売ることで解決できる。2つ目は薬使いが三年間の間に溜め込んだ私財を切り崩すことで建物を買うか建てるかしようと考えている。

しかし、問題は3つ目である。ゴブリン討伐の補助金のために自分の給料を減らしてもいいなんて人がそう何人もいるとは思えなかつたからだ。

「「「「「「…………」」」」」

先程と同様に皆、沈黙してしまう。

この解決策の実行するのは不可能。ここにいる誰もがそう思つた時、それは現れた。

〈コンコン〉

突然、扉をノックする音がその場に響き渡つたのだ。ここは冒険者ギルド内の奥にある防音性の高い部屋（受付嬢が用意してくれた）

そんな場所をわざわざ訪ねる人物はそうはないはずなのだ。

「コンコンコン！」

「受付嬢さん。お願ひします」

「わかりました。皆さんにお話を続けてください」

再度扉がノックにされたことで受付嬢が動き出す。薬使いが動かなかつたのは、この場所がギルドの中である以上、こここの職員である受付嬢が出るのが一番良いと判断したからだ。

意外なことに受付嬢はすぐに戻ってきた。

「あの、薬使いさん。お客様が来られていますよ」

「俺ですか？」

「はい。女性の方が来られています」

訪ねてきた人物に心当たりがない薬使いは思わず首を傾げる。

「わかりました。ちよつと話しおきます」

「それが中でお話をされたいそうです。問題解決の力になれると仰っています」

「…………取り敢えず、入つてもらつてください」

何の問題なのか、何の力になつてくれるのか、訳がわからない薬使いだつたが、その人物を部屋に招き入れることにした。

「久しぶりね、薬使い。女神官は昨日ぶりかしら？」

「アンタは……」「女治療師さん？」

入つてきたのは薬使いと神官見習いの知つている人物だつた。彼女は神官見習いと同じ神殿に所属する人物もある。

「お知り合いでですか？かなり親しいそうですが」

「ええ、神殿に所属している治療師です。それなり付き合いも長いです」

「そうね。あたしがゴブリンに襲われたトラウマで暴れていたのを、あんたが止めてくれてからの付き合いよね」

「ちよつとまで！話していいのか!?」

「ここにいる人達なら話しても大丈夫よ。寧ろ聞いてもらわないと私の要件が話しづらいのよ」

彼女は普通なら決して他人に話さない暗い過去をあつさり語った。  
女治療師は薬使いが初めて神殿を訪れた日に暴れていた冒険者の女性である（2話参照）

彼女はあの事件の後、元々の明るい性格もあつてか瞬く間に立ち直り、そのまま神殿で働き始めたのだ。そして適性を認められて治療師となつたのだ（神殿で会うたびに薬使いに絡んでいた）

「それで自分の過去を話してまで、語る要件つてなんだ？」

「担当直入に言うわ。あたしを雇つてほしいのよ」

「はい？」

「だから、アンタがこれから作る〈ゴブリン討伐の依頼料を援助するために作る会社〉であたしを雇いなさいって言つたのよ」

「何で知つてい「神殿で話してるのはを盗み聞きしたわ」お前、マジで神殿の治療師か！」

堂々と盗み聞き宣言した女治療師に、シリアルスな空気など忘れたかの様なツッコミを入れてしまう薬使い。

「そんな。些細なことはどうでもいいわ。それで雇つてくれるの？くれないの？」

「いや、入つてくれるのは嬉しいけど、お前1人じゃ「私と同じ気持ち子を1~4人見つけて置いたわ」

「準備いいなおい！」

「時間をかけて探せばもつと見つかるはずよ」

どんどん話を進める女治療師に、薬使いは押され気味になりながらツッコミをいれていくが彼女は止まらない

「彼女達もあたしと同じで、大なり小なりゴブリン共の被害に遭った子達よ。大切な人の命を奪われたり、自分自身が傷つけられたりしてね」

「…………」

「正直、治療師となつた今でもこの手で復讐してやりたいって気持ちは残つているわ。でも、あたし達にそれはできない」

ゴブリンの被害にあつた人の多くは心に大きな傷を負つている。ゴブリンそのものにトラウマを持つてしまつた人も少なくない。彼

女らはゴブリンを見るだけで気分悪くなり、重度の人だとその場で錯乱状態になつてしまふのだ。そんな彼女らがゴブリンに復讐できる筈もなく、彼女達はゴブリンに対する憎悪をどこにもぶつけられずに抱え続けているのだ。

「悔しいけど、あたし達に直接復讐する力はない。一生この気持ちを抱えて生きて行くかと思っていたわ。そんな時に聞いたのが、あんたの会社設立の話よ。直接がダメなら間接的にするしかない。私達の稼いだお金の一部があの害獣共を駆除するための助けになるなら、喜んで安い給料で働いてやるわ」

「いや、でも安い給料だと生活が苦しくなるだろう。他の子は知らないがお前は治療師としてある程度お金が入つてているだろう。その生活を捨てていいのか？」

「アンタのことだから、安いって言つても最低限生活する額は意地でも用意するでしよう。自腹を切つてでもね」

「うつ!？」

「それにお金への興味が薄いあんたなら、売り上げから援助金と建物の維持費なんかを引いた分の残りほとんどをあたし達の給料にするでしよう？ 売り上げが上がれば上がるほどもらえる給料が増えるってことじやない。それだけでもやりがいのある仕事よ」

「……」

「それに今後もあたし達みたいな子が出た時、神殿の以外の受け皿が必要でしよう？」

ゴブリンの被害者の中には元の生活に戻れない人達がいる。故郷の村を滅ぼされて行き場を失つたり、ゴブリンに性的な暴行を受けたことで村の人に腫れも扱いされて居場所を失つたりと状況は様々だ。

その多くが神殿に入るが、それを受け入れている神殿側のキャパシティにもいつか限界がくるかもしれない。そうなる前に他の受け皿を用意しておく必要があるのは確かなのだ。

「どう、これでもあたし達を雇えない？」

完全に性格を見抜かれた上で論破され、ぐうの音も出ない薬使いだった。このままでは覚悟を決める間も無く、人の人生の一端（仕事）

を背負う立場になつてしまふ。最終的にそうなるにしてもせめて考  
える時間が欲しかつたのだ。

薬使いが苦し紛れに、空氣となつていた仲間達を見ると…

「……問題解決だな」→スレイ

「良かつた。これでみんなの頑張りが報われるね！」→牛飼い娘  
「ここまでお膳立てされたんだから男なら覚悟を決めないとな、薬使  
い！」→槍使い

「頑張つて…ね」→魔女

「おっしゃあ！問題解決を祝つて飲むか！」→重戦士

「ふつ、飲み過ぎるなよ」→女騎士

「会社の代表か、薬使いも出世？したなあ」→男戦士

「頑張ればお給料が上がる仕事か：私も雇つて貰おうかな？」→野伏

「頑張つてください。書類はお手伝いしますから！」→受付嬢

全員が決まつたことを前提に話をしていた。薬使いに味方はいな  
い。

「大丈夫です。兄さんは1人じやありません。私も全力で支えますか  
ら挑戦してみましよう」

最愛の義妹にまで応援された薬使いは、長い沈黙の後に覚悟を決め  
たのだった（抵抗を諦めたともいえる）

「はあ、わかつた。事業を立ち上げてお前らを雇う。それでいいんだ  
な？」

「わかればいいのよ。うふふ、それではお願ひしますね。代表」

「ここに我らが主人公＝薬使いが、薬師兼冒険者兼会社のの代表と  
なつたのだった。

突如あらわれた大きな壁は乗り越えた、もう薬使い達の道を阻む物  
は殆どない。

後は実際に変えるだけ。変化の波はすぐそこまで来ている。

おまけ

「よつしやー！野郎ども宴だ！」

「「おおおおおおお！」」

「……学院に行く準備、忘れない様にしないとな」

背後で騒ぐ男どもを尻目に薬使いは軽い現実逃避をするのだった。

## 第18話

会社設立が決まってから数日後、薬使いのは最後の難関に挑むため学院を訪れていた。

学院の幹部達に The Goblin Truth の内容が正しいものであることを認めてもらうためだ。認められれば書籍に学院の承認印を付けることが許可される。これが有ると無いでは書籍の信用度は天と地ほどの差が生まれるのだ。

学院に到着した薬使いは早速、説明会に挑むことになった（説明会に参加者は35名。その内は30人が学生）当初の予定では学院長も含めて5人の代表者に説明するはずだったのだが、何処から説明会が行われることを聞きつけた生徒達が、参加を希望してきたことで参加人数が増えたのだ。

説明会（という名の討論会）は異様な緊張感の中で行われた。例え、最弱と言わされたゴブリンに関する知識であつても、彼らは妥協することない。薬使いが1を話すと10の質問をぶつけてくるなど、納得するまで彼らは止まらないのだ。質問が止まらないため、時間もどんどん延長されていき、終わつたころには6時間を経過していた（説明会を終えた薬使いは「…二度やりたくない」と呟いたと言う）

その甲斐あつて The Goblin Truth はその内容が正しいものであることを学院に認められたのだ。

---

ゴブリンの真実の姿を記した書籍〈The Goblin Truth〉

t h <

The Goblin Truth の内容が正しいことを証明する〈学院の承認印〉

書籍の内容が広がることで発生するゴブリン依頼の増額分を相殺する〈補助金〉

書籍を広げる上で必要となる〈各地の権力者や有力者とのつながり〉

ここに必要なすべてのものが揃う。これより薬使いによる総仕上げが始まつたのだ。

総仕上げと言つてもやることは簡単で、The Goblin Truth Ruthを大量に複製し、町や都市を中心に無料で配るだけなのだ。そうすることで書籍の内容は人から人へ、町から村へとゆつくりであるが確実に広がっていく。後は不測の事態に備えつつ待つだけだつだ。

結論から述べるとThe Goblin Truthの内容は多くの人の耳に入り、世界に広がっていたゴブリンに対する間違つた認識は現在進行形で修正し始めている。

本が配られた当初、The Goblin Truthは当然ながら世界中で大きな波紋を生み出した。

#### 〈ゴブリンは弱い〉

それは誰もが知つてゐる世界の常識、それが覆されたのだ。本の内容を知つたある者は冒險者ギルドに駆け込み、またある者は国の機関に本の内容の正否を問い合わせに押しかけた。

その人数は時間が経つにつれて増加し、このまま大きな騒動に発展するだろうと多く人が予想した（本の内容が偽りであると騒ぎ立てる者達もいたが、全ての本に〈学院が内容を保証する〉承認印が押されてこともあり、すぐに何も言えなくなつた）

しかし、実際にはそなはならなかつた。この騒ぎはある人物が動いたおかげで一ヶ月もたたずに収束したのだ。その人物とは剣の乙女だつた。

The Goblin Truthの内容を知る彼女は自らが持つパイプを使い、国のトップである国王と連絡を取つてゐたのだ。

剣の乙女のもたらした情報でThe Goblin Truth

hが各地で大きな騒動を引き起こす可能性が高いことを知った国王は即座に動いたのだ。書籍が配られる町のトップと有力者に使者を送り、これから起ころるであろう騒動の対策をさせ、騒動が起こつたらば、即座に行動し事態の収束に協力するよう勅命を出したのだ。これより騒動拡大の出鼻を抑えることに成功し、短い時間で収束させることができたのだ。

書籍が配られると同時に冒険者ギルドも動いている。モンスター ブックのゴブリンの記述の変更と討伐依頼料の増額（補助金の話も込み）を発表し、間違った記述を載せていましたことを正式に謝罪をしたのだ。

その責任を取つて幹部の3分の1が退任することも伝えられた（全員が例の幹部達で、その内の1人は罪に問われて牢獄行きが確定） ギルドが正式に謝罪し、責任を取つたことで彼らへの風当たりは幾分か良くなつた。それに加え、The Goblin Truthを世界に広げるに当たつてギルドから多額の寄付がされたことや一部ギルド職員がThe Goblin Truthに製作に関わつていたことが書籍の最後に記述されていたのもギルドへの責任追及の手を緩める一因となつたのだ（薬使いとしてはギルドに責任を負わせたいわけではないので、話し合いの結果この文が載せられることになつた）

冒険者ギルドの怠慢を責める声はまだ有るが暴動が起ころる程ではなくなつたのだ。

これらの知らせを受けた薬使いは辺境の街の酒場に一角を貸し切つて仲間達と喜びの感情に任せて飲みまくつたのだった（この後、男は全員酔いつぶれて女性陣に介抱される事となつた）

The Goblin Truthは世に放たれた。この書籍の内容が世界の眞実となるには10年単位の時間がかかることだろう。それでも確かに始まつた。変化の波は確実に広がり始めたのだ。そしてそれを成し遂げた薬使いは今や時の人となつた。

そんな時の人こと、薬使いは

「G Y A G Y A！」

「G U G G Y A！」

「畜生おおおお！早くこい！ゴブリン軽視が完全に消えた世界！俺と  
こいつらとの接触率を下げてくれええええ！！！」

今日もゴブリンと戦っています。彼がゴブリンがと戦う回数が減  
る日は果たしてくるのか、それを知るものは（作者以外）いない。

おまけ。

「なあ、女治療師さんよ」

「何よ？」

「この建設中の建物はお前達の仕事場と寮だよな？」

「それ以外に何があるのよ」

「そうだよな…………何か規模がデカくないか？」

薬使いの現在地は辺境の町の外れにある空き地である。会社設立  
予定地であるこの場所では建設工事が行われている。そこまでは問  
題ない。

問題なのは今行われている基礎工事の規模である。普通の建物に  
建てるにしては大規模過ぎるのだ。

「そう？これくらい普通じゃない？」

「そうか、普通か…………んなわけあるかい！明らかにデカ過ぎるだろ  
！俺の渡した金額だと明らかに足りない規模の工事をしてるんだけ  
どな！」

「…………（すー）」

「目をそらすな。吐け！どこから足りない分は出した!?」

仕事場を建てるに当たって薬使いは女治療師に一定の金額を渡した。そのお金の足りる範囲で他の子と話し合い、建物の形を決める様に頼んだのだ。そこで働くのは彼女達のだから彼女達が建物の形を決めるのが良いと考えたからだ。だが、目の前で行われている工事の規模はどう見てもおかしい。どう見ても薬使いの渡した金額で建てられるものではない。明らかに渡した倍の金額がかかるものだった。

「……多額の寄付が有つたわ」

「誰から!?」

「……………剣の乙女様から」

「あの方か！」

剣の乙女はThe Goblin Truthの制作に協力してもらつて以来、理由はわからないが毎回多額の寄付をしてくれている。そんな彼女に薬使いは彼女に頭が上がらなくなつてきているのだ。それに加えて今回の寄付である。

「俺、本気で人の人に足向けて眠れなくなりそうだ」

「それは……否定できないわね」

「とりあえずお金の出所はわかつた。じゃあ何でその寄付が来たのを俺が知らない!?」

女治療師が優秀なので、名ばかりとなる可能性があるが名目上の代表は薬使いである。知らないのはどう考へてもおかしかった。

「叫び続けて疲れない?」

「疲れるわ！肉体的も精神的にもな！いいからさつさと話せ！」

「……わかつたわよ」

女治療師の話を要約すると。寄付金が来たのは建物のデザインを決まる寸前で、どういう訳か薬使いではなく彼女の元に届いたのだ。寄付金と共に渡された手紙には、是非このお金を使ってより良い貴方達の居場所を作つてくださいと書かれていたらしい。そして女治療師達が良ければ少しでも大きい建物を作つて欲しいとのことだった。

手紙と寄付金を受け取った女治療師は同僚となる女性達と話しあい、建物のデザインを1から作り直した。そして感謝の手紙と共に完成予想図を剣の乙女に送つたのだ。黙っていたのは寄付金が薬使いでなく、自分に送られてきた時点で何かしらの意図があると考えたからだった。

「……成る程……一応聞くけど、剣の乙女様の意図はわかつたのか？無理に教えるとは言わないけど」

「さあ、でも予想は着くわ。アンタ、目立つのが好きじゃないわよね？」

？

「そうだな。規模によるがあんまり目立つたくはないな」

「そうよね。でも、この手紙に従つて大きい建物を建てたら確実に目立つわよね？」

「…………」

「アンタのことだから、目立ちたくないアンタの意志と、剣の乙女様への恩義の板挟みになつて苦悩するのは目に見えるわ。それを気にしてアタシに送つて来たつてどこじゃない？」

「あり得るな」

「お金を払つて工事が始まれば、もう後には引けないから諦めるしかない。無駄な苦悩がないだけそつちのほうが幾分か気が樂つてことよ。予想だけどね」

「…………これは感謝した方がいいのか？」

「好きにしたらいいわ」

こうして女治療師達の職場となる建物は建築されていくのだった。

「建物が出来たらお礼の手紙送らないとな」

「そうね。お礼に招待しないといけないわね」

この時の薬使いは知らなかつた。建物が完成し、お礼に剣の乙女様を招待した結果、彼女がそこを気に入り、定期的にやつてくる様になることを（毎回、従業員達と楽しそうに談笑しては満足して帰つて行くのだ）